II
リーパーズ
コーストの
近代史
-著者-
クランリー
ヒューバート

注意
ゲームのネタバレが含まれています
自己責任でご覧ください

目次

アルフ

序文

歓迎します、親愛なる皆さま！

W Divinity: Original Sin 2の世界へようこそ！この世界の英雄と放浪者、神々と獣、土地と数多の歴史へようこそ！ リヴェロンのこの地方を作り上げながら、私たちはそれをより確固たるものにしたいと考えていました — それがより暗い鋭さを持つようにと。私たちはこの物語があなたを導き、神性を垣間見せ、最終的に世界を形作る選択をあなたに委ねたかったのです。

　そしてそれ以上に、Divine Divinity以来の私たちのゲーム品質の証である特徴的なスタイルを保ちながら、その壮大な物語を支えることができる世界を望んでいました。私たちはプレイ中にあなたに反応する世界を作りたいと思っていました。しかしその物語を書き上げながら、世界の側が私たちに反応していることに気づきました。開発中、キャラクターたちが有機的に立ち上がり、そして倒れ（完全に消えた者たちもいます）、物語は予想もしなかった場所へと私たちを導き始めました。新しい興味深い光景が地平線に現れ、私たちは喜んでそこに突き進みました。今、私たちはDivinity: Original Sin 2の世界の断片をあなたにお届けすることができるようになりました。そして私たちは、そこに生命を吹き込むお手伝いができたことを、この上なく誇りに思います。

お楽しみください！

~

ライティングチーム

クランリー・ヒューバートによる
アークスから見たリヴェロンの現代までの歴史の要約

美しきリヴェロンの中でも数多の崇高で名高き歴史を持つ地域、リーパーズ・コーストに関する知識をここに記す。我々は最も面白く、また最も困難な時代に生きているが、私がこの本を執筆するに至ったことには理由がある —— 我々は自らが何者で、何処から来たのかを忘れてはならないのだ。アークスの偉大なる都市の些末な我が書斎から、近年の出来事に最も深く影響を受けたこの地方の価値と、そこに住む人々の見解を伝える努力をするとしよう。

我らが晴朗なるこの地は栄光と悲劇に満ちている。しかし後の世代が、七大神が我らに授けた偉大なる博愛を十分に評価することができるように、全てが同じ尺度で記されなければならない。未だ来たらぬ人々に与えることができる最高の贈り物は、彼らが我々から学ぶことができるように、我々の経験を記すことである。末筆ながら、私はこの世界の複雑さを只一冊の本に収めることなど叶わないことを認めなければならない。然るに、私の粗末な本が、読者諸兄姉が外へと繰り出し、自らリヴェロンを経験する端緒となれば幸いである。

~

アークス歴史ギルド
クランリー・ヒューバート

創世

リヴェロンの創世と、それを支配する偉大な力について言及しなければ、リヴェロンの驚異に関する書物としては不完全であろう。確信をもって示すことなど誰にも不可能ではあるが、これは我らが古の物語に記された創世の伝説だ。

始めに根源ありき

Bこの次元と世界、そしてその内部の万物の誕生の前には、ただ純粋で自由なエネルギー — 我らが根源として知ることとなる、創造的な生命の原料 — があった。それと対立していたのが虚無 — 破壊と無 — である。これらの偉大な両極は、互いにバランスすることで存在に至った。

全能の存在が、それが目に見えぬとしても、これらの偉大なる力を統轄したのだと信じる者もいる。そのような存在が、本当に我ら常命の眼には見えぬほど高尚な次元から全てを見守っているのか、我々は知らない — 知ることはできない。もしくはそのような存在は、祖先がどのように命を得たのかを説明するために先人達が語った、焚き火の寓話であるのかもしれない。

異なる種類の神々がいた。若さと老い、強さと弱さ、記憶されたものと忘れ去られたもの。これらの神々は信仰がなければ生き残ることができず、神々を支配するほど成長することもなかっただろう。神々の力は、世界への影響力と共に、そして世界の住人の信心の増幅と縮小と共に、満ち欠けを繰り返す。例えば雷の神は嵐によって力を増し、水の神は洪水の時に肥え太る（特定の神々は、多くの嵐や洪水の原因となっていたのだ）。

対立する力が創造に至る —— 神の誕生

W均衡と衝突が存在する場所で、生命が根を張った。宇宙が誕生したのである。そして我らの土地を祝福する植物が光を探すように、根源は創造が可能な次元へとたどり着いた。同様に、虚無は支配が可能な次元へと移り住んだ。そして幾多の次元で、根源と虚無は優位を求めた。根源が勝利した場所では、命が花開いた。

リヴェロンはそのような世界の一つだ。我らの領域の特定の様相は、根源が元素の神格を — 原始的な力の存在、我らが神々として知る最初の霊を — 自発的に創造するほど強力であることの証左である。

七大神

七大神の誕生

S時を経てこれらの神々は、彼らが創造した存在の本能的な行動により成長し、進化し、もしくは縮小し、消滅した。間もなく主要な神格が顕現した ―― 例えば、常命の者達が成長し流血と親交を学ぶと共に力を増した、戦争の神や慈愛の神などだ。

神々が成長するにつれ、初期の六つの種族が、我々が「崇拝」として知る方法によって、根源の濃縮を儀式化した。七柱の主要な神が顕現した ―― 一柱が一つの主要な種族のために（そして一柱は魔法使いのために）。七大神は崇拝という形で信仰者から受け取った根源を使い、力を得た ―― そしてその神の力により、その種族もまた力を伸ばした。他の神格は太刀打ちできず、小さな神々は消滅するか吸収されることとなった。

もし諸君が、魔法使いは「種族」ではないと指摘したとすれば、私は得心して頷くだろう。そしてまた、諸君に最寄りの魔法使いとの会話を試みるよう指示するだろう。さすれば諸君も、彼らが歴史的に、文化的に、社会学的に、人類学的に、そして言語学的にさえ、彼ら自身の分類に属していることに同意するであろう。

ラリック

最初の七大神ラリックはヒューマンの守護となり、彼らに繁栄し、適応し、商業、統治および職人技能において不可欠な存在となるよう奨励した。彼は身体的な強さや長い命に伴う高尚な離別については、殆ど気に掛けなかった。ラリックは人々に有能で、快活で、徹底的に生存技能に集中するよう求めた。彼の種族 ― ヒューマン ― は、リヴェロンにおいて長らく優位を享受してきた。

ティル・センデリウス

詩人ティル・センデリウスは森林地帯を領土とし、エルフ達に自然界の叙情的な愛を注いだ。彼は自らの種族に半不死の祝福を与え、人肉食の儀式により個々の知識を世代を越えて濃縮する能力を授けた。記憶は肉体を越え、エルフは幾世紀の知識を備える ―― ティル・センデリウスの設計通りに。

デュナ

長い髭と屈強な体躯。デュナはドワーフを自らに似せて創り、数世紀に渡って、多くの領域に跨る王国を築く彼らと共に生きた。ドワーフの忍耐力と活力は、彼らを、情熱的な指導者や外交官は言うまでもなく、恐るべき戦士や建築家にさせた。その後彼らの王国は衰えたが、粘り強い人々の威勢と猛威は衰えてはいない。

七大神

ゾール・スティッサ

女神ゾール・スティッサはその愛、秩序、道理、そして美を吹き込んだ誇り高き優雅な戦闘種族を指揮することを望んでいた。彼女の種族リザードはその勇敢さ、科学的素質、そして芸術および様式に対する嗅覚において比類ない。ゾール・スティッサが彼らに与えた贈り物は数多く、リザードは自らが最も祝福され、最も価値ある種族であると信じている。

ヴロギール

その残虐性と暴力性が有名なヴロギールは、オークの父となった。彼は実用的な生存能力、実直さ、身体の衝動との親交を奨励した。他の種族はオークを概して野蛮であると見なしているが、ヴロギールは彼らに偉大な包容力、ユーモア、儀礼、そして敬意を授けた —— 彼らの文化のその側面が、余所者に向けられることは滅多にないが。

ザンテッサ

喜びと笑いの女神ザンテッサは、彼女が教えられる以上の事を、彼女に教えることができるほど知的な種族を求めた。その種族インプは他の種族を寄せ集めたよりも早く新たな技術を開発する、この地で最も偉大な技術者および発明家となった。彼らは神に知識を捧げ、ザンテッサは大きな興味と満足と共にそれを受け入れる。

アマディア

女神アマディアは、完全なる孤独に生きることを好む変わり者であった。千年が過ぎ、六つの種族が大陸に広がる中、ある日彼女は一人の魔術師と戯れた。この交わりは数名の半神を生むこととなった。彼女はその愛人に不死を授け、全ての魔術師の母なる守護者として振舞うことを決めた。魔術師は独立した種族とは見なされないが、多くの者はアマディアを全ての魔法の母として崇拝することに誇りを持っている。

神性

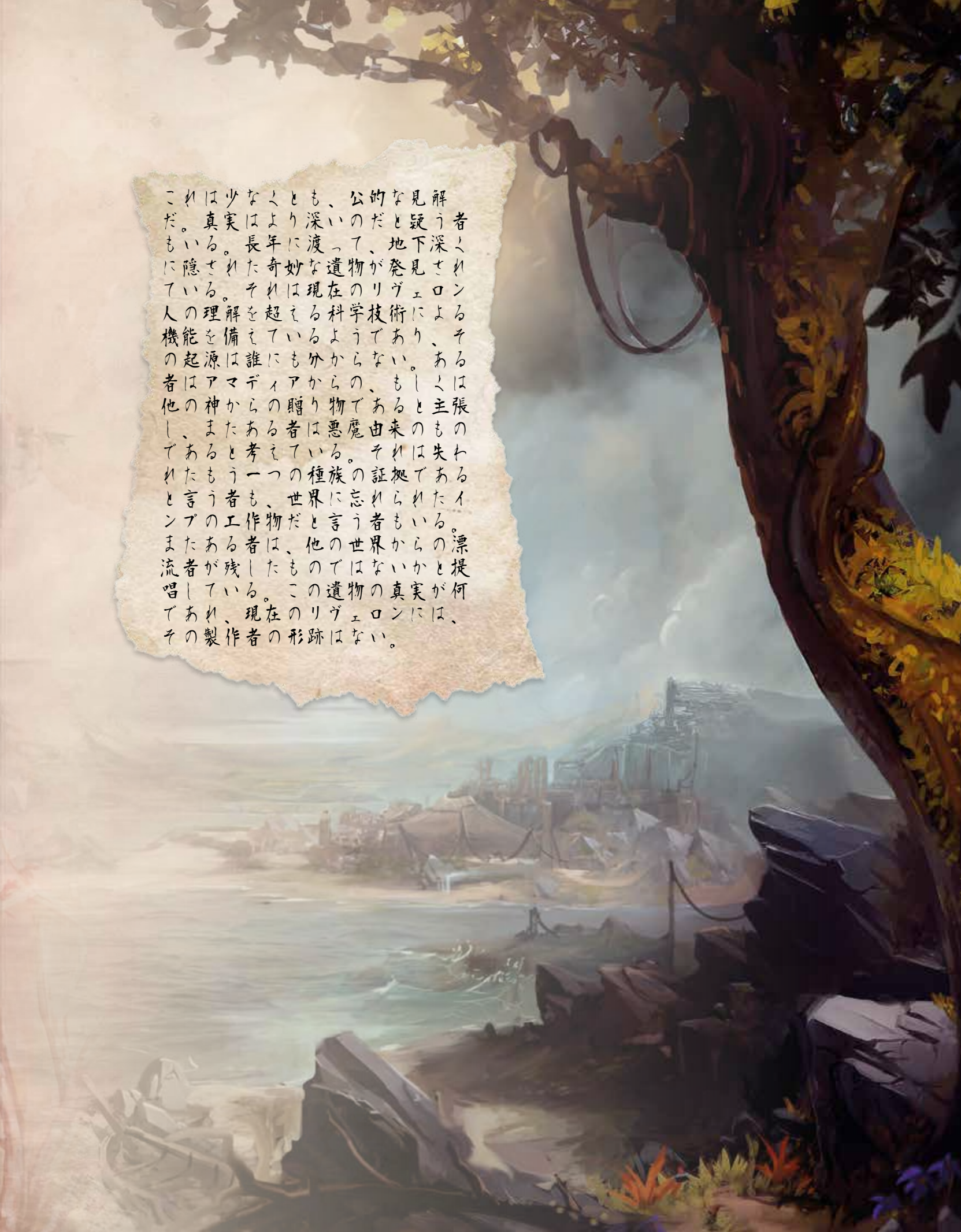
神性の化身

A七大神の力が増すにつれ、その闘争の性質も強まることとなった。自らの大地を他の者に明け渡すことを望む者はおらず、その争いは彼ら自身の種族によって支持されることとなる。戦争が戦争を生み、予てより彼らを結びつけるものなどなかった... 虚無が現れるまでは。現実性の織物は堅牢であったが、完璧ではなかった。虚無は周期的にその裂け目を見つけ、種族のみならず、神々さえも脅かすようになった。

虚無を止めるためには団結する必要があることを知った七大神は、神人を創り出した。孤独な常命の闘士に神の力を与え、死を超越し、彼らの化身となることが可能な英雄に。神人は虚無を撃退し、現実性のベールの向こうの領域へと追放するだろう。

そしてそれは現実となった —— 神人は幾度も立ち上がり、虚無を倒す。世界を救う最も近年の神人は、ルシアンだ。彼は一度ならず虚無と戦い、勝利した。しかし今、ルシアンは死に、新たな神人は現れていない。

この闘士の継承はゴッドウォークンを通じて為されてきた —— 最初の混沌戦争において虚無を退ける助力となった、常命の英雄たちの子孫を通じて。その血筋はゴッドウォークンが常命の者には困難なレベルで根源を視認し、操ることを可能とする。ゴッドウォークンはその能力を使うことで、神々の贈り物を、七大神全てを合わせた力を、受け取ることができる唯一の存在となるのだ。神人ルシアンはヒューマンであったが、ゴッドウォークンは全ての種族から現れ、根源は各自に異なった方法で顕在化する。彼らは生来根源を見る能力を持ち、そして適切に訓練を受けることにより、根源を吸収する能力を得る。その能力を使い、彼らは信じられない偉業と創造... そして破壊を成し遂げるだろう。

これは少なくとも、公的な見解だ。真実はより深いのだと疑う者もいる。長年に渡って、地下深くに隠された奇妙な遺物が発見されている。それは現在のリヴェロン人の理解を超える科学技術による機能を備えているようであり、その起源は誰にも分からない。ある者はアマディアからの、もしくは他の神からの贈り物であると主張し、またある者は悪魔由来のものであると考えている。それは失われたもう一つの種族の証拠であると言う者も、世界に忘れられたインプの工作物だと言う者もいる。またある者は、他の世界からの漂流者が残したものではないかと提唱している。この遺物の真実が何であれ、現在のリヴェロンには、その製作者の形跡はない。

ルシアンの戦争

1218 AD
ルシアンとブラックリング

ブラックリングの正確な起源について、現存する史書には明確に記されてはいない。この邪悪な秘密結社は放浪者、追放者、闇の魔術師や禁じられた技術の実行者を、ロード・オブ・カオスとして知られる謎めいた指導者の穢れた旗へと引き寄せた。リングは自らが甚大な破壊の箱舟であると証明した ── 世界が虚無へと墜ちる前に止めなければならないものだと。

ブラックリングを破壊する任務はルシアンに託され、この神人は見事彼らを打倒した。しかしルシアンは後に致命的だと証明される過ちを、むべからぬことであるが、犯してしまった。その勝利の直後、彼は子供に出会った ── ロード・オブ・カオスが降誕するであろうと預言された、一人の幼児に。この最も高潔な神人が、この時点でもう一つだけ命を奪うことを選択すれば、ブラックリングの運命は封じられていたことだろう。

ルシアンはその子供を生かすことにした。

1233 AD
ダミアンとイェルマ

ルシアンはその子供をダミアンと名付け、最初の子供として育てた。後に生まれることとなる実子アレクサンダーの兄として。しかし若者となった時、彼はイェルマという名のブラックリングの魔女と恋に落ちた。彼女は彼に「本当の」運命を掴ませようとする。最愛の息子を救うために、ルシアンはイェルマを殺害した。悲しみに暮れるダミアンは、復讐を誓った。

1233 AD
ルシアンの犠牲

Lルシアンはエルフの故郷の中心地で、ダミアンとその軍勢と向かい合った。そこで彼は、世界を変える力を持つ兵器を — 死の霧として知られる兵器を使用した。ブラックリングが十分に引き付けられた時に、ルシアンは死の霧の引き金を引き、空気自体を致死性に変えた。ブラックリングはその地で抹消された。

ダミアンは死んだ。勝利の日だ。だが犠牲は甚大であった。神性教団は恐ろしい損失を被った。エルフは大半が死に絶え、彼らの故郷は人の住めぬ地となった。

そしてルシアンもまた、言うのも痛ましいことであるが、この地で亡くなった。神人は自らを犠牲にして、我々をブラックリングから、そして不滅の虚無から救ったのだ。

1233 AD
混沌戦争

Dダミアンはブラックリングの元首となり、すぐに破滅的な戦争が始まった。決定的な戦いが繰り広げられ、神性教団は壊滅したかに見えた... だがルシアンは、敗北の顎から勝利をもぎ取ったのだ。

第一章　クランリー・ヒューバートによるリヴェロンの歴史の要約

ルシアンの戦争

1234 AD
神人ルシアンの死

彼の偉大な功績を偲び、年次の祝祭日が制定された。ルシアンの日のお祝いの一環として、毎年巡礼者がアークスの都市に集い、堕ちた救世主の墓へ弔問に訪れ、無窮の祈りを唱えるのだ。

この祝祭の人気は、虚無の脅威が再燃したことによって高まった。先の神人が敬われている限り新たな神人が現れるのだという信念は、共通認識となった。

1234 AD
ヴォイドウォークンの最初の出現

当時は殆どの者がそれを知らず、人々はその重大性を理解することができなかったが、神人がその命を投げ出し我々を救った大戦の余波は、悲しみ以上のものをもたらした。奇妙な生き物が死の霧から現れた —— この世界が祝福されていることを示す獰猛で美しい獣たちの、汚染され歪められた異形が。我々はそれをヴォイドウォークンと呼び、この世界でその疫病の影響を受けていないものは少ない。時が経つにつれ、この地を闊歩するヴォイドウォークンは数を増した。この下劣な生き物は、存在自体の終わりを告げる者は、日常的にリヴェロンの人々を脅かす。

平和を達成したその瞬間に、我々には新たな脅威が与えられた。そして神人ルシアンと、彼がこの世界にもたらしたものの中で、残ったのは神性教団だけだ。

1235 AD
ルシアン亡き後の神性教団

ルシアンの下で神性教団は大きく成長し、そして彼の死後、教団は厄介に成長した。その中心的な機能 — 神人に仕える — は残っていたが、ルシアンはもはやいない。指導者を失い、教団は崩壊を始めた。神人抜きに、教団は人々をヴォイドウォークンから守ろうとした。

ルシアンが苦労の末に手に入れた平和がもたらした希望は、すぐに人々の絶望と教団の緊張に取って代わられた。この紛争を解決することは教団の新たな指導者 — ルシアンの唯一生き残った息子、アレクサンダー — にとって、最も喫緊の課題だ。

1242（現在）
アレクサンダーの立身

アレクサンダーのリーダーシップの下でさえ、ヴォイドウォークンとの闘争において神性教団は大きな課題に直面していた。教団が、全てを変える発見をするまでは。全土からの報告書を調査し、彼らはヴォイドウォークンの出現が根源の使用と関係があることを突き止めた。

根源の魔術師がヴォイドウォークン襲来の原因であった。故に、アレクサンダーは世界をヴォイドウォークンから守ることができるだろう。世界を根源の魔術師から守ることによって。

ルシアン亡き世界

鉄槌のダリスと、フォートジョイという解決策

D大戦におけるブラックリングに対するダリスの功績は、彼女に高潔と強靭さという名声を — そして「鉄槌」の二つ名を与えた。彼女は決意と理想主義の証左として、それを大切にしている。ダリスは根源の魔術師を、リーパーズ・アイの島にあるフォートジョイの遺跡に追放するようアレクサンダーを説得した。狂人ブラッカス・レックスとして有名な、大昔に死んだ根源の王の古代の要塞は、根源の魔術師の強制収容所となった。そこで彼らは隔離される。彼らの — そして我々の — 悩みの種の治療法が見つかるまで。

根源の魔術師に対するアレクサンダーの厳しくも温かい処置を世界が正当支援する一方で、神性教団内部の分裂は激しさを増していく。伝統主義者のパラディン達 — 高貴な家系の出であり、ルシアンの初期の戦士の直系の後継者だと自認している戦士達 — は、根源を強力な武器と見なした。虚無との戦いを助ける、選ばれし少数の者にのみ認められた武器だと。

だが世界は変わり、現在の教団はパラディンのライバルであるマギステルによって支配され、パラディン達は憤りを募らせている。出自や社会的地位、教育に関係なく、様々な立場の人々から集められたマギステルは、庶民の安心と安全を象徴している。マギステル達はアレクサンダーに — そしてダリスに — 彼らとしては最大限の忠誠心を示している（困難な時代には貴重なものだ）。根源の魔術師の危険は厳しく対処されなければならないと、広く信じられている地域もある —— 特に彼らの安全のために首輪を着けたくはない根源の魔術師もいるためだ。このような場合の根源の魔術師に対する断固たる態度が、マギステル達の一番の取柄であった。

ルシアンの遺体

ルシアンの常命の遺体の管理をめぐる争いは、パラディンとマギステルがどれほど気難しい関係になるかを示す、最初の兆候だった。教団の古く輝かしい支系であるパラディンは、彼らがルシアンの墓所の唯一の守護者となる権利を持っていると考えていた。彼らはアークスに大聖堂の建設を始めた — 彼らはその過程を早めるために、根源のテレキネシスの力を公に使っていた。しかしマギステルは教団内で急速に支配的な存在となったことで、ルシアンの墓所を守る役割は自らにあると感じていた。聖都における対立は収拾がつかなくなる恐れがあり、アレクサンダー主教による介入を余儀なくされた。最終的にルシアンの遺体はパラディンの大聖堂に置かれ、マギステルはアークスの都市に新たな司令部を設立することを許可されることとなった。

アレクサンダーの右手にダリスが立つ。
神性教団軍において、最年少の将軍であった。

ルシアン亡き世界

アレクサンダー

神人ルシアンの唯一の実の息子であるアレクサンダーは、すぐに神性教団を支配するものと目された。父のような経験に欠けていた彼は、才能ある相談役を集めようとした。そのような腹心として、ダリスは素早く彼の右腕となり、彼にあらゆる忠告を与えることとなった。

このような手法は、表面上は称賛すべきものだろう。だがその結果もたらされた政策はどうであろうか？ マギステルの地位において、他種族よりもヒューマンが好まれるという近頃の進展に、私は幾らか不安を覚えている。この地の人々皆を守るために召集された者達は、この地の人々全てから引き抜かれるべきであろう（ヒューマンがドワーフやエルフやリザードといった同胞よりも、明らかに優れているとしても）。しかしながら我々は、神性教団が何が最善かを把握していると信じなければならない。我々の神性の探求は、彼らが導くのだから。

父のようなゴッドウォークンとして、アレクサンダーは次の神人となり、迫りくる虚無から世界を救うだろう。だが神性教団の指導者達はアレクサンダーが次の神人となるという事実は知っているが、その方法は知らない。彼の目的地は明らかだが、ルシアンの導きなくして、その道筋は明らかではないのだ。

悲しいかな、アレクサンダーの昇華は今や神性教団の全面的な支援を受けているが、彼らはそのような明確な目的を常に持っていたわけではなかった。かつての教団は門戸を開き、アレクサンダーの神性への追及において競争相手となる他のゴッドウォークンを探し出そうとしていたことさえあったのだ。

根源の首輪

根源の魔術師が力を使い、自らや周りの者達を危険に晒すことを防ぐ並外れた装置だ。永遠の信頼を得るために一人の根源の魔術師が志願し、この首輪を身に着け、その輝かしい実例を提供した。アレクサンダー自身だ。真実を知る者は少ない ― 人々は神人ルシアンの帰還のために無窮の祈りを唱えているが、神性教団のアレクサンダー主教は実は根源の魔術師なのだ。そしてそれ以上に、彼はリヴェロンの最も大きな希望なのである。

この大災害は、幾らか控えめに「ミステイク」と呼ばれている。真実、これは理由なき残虐さによる、言語に絶する行いであった。そしてそれは言語に絶するものであったため、ここで語ることはできないのだ。

神性の探求

果敢であり、有能であり、神性教団の理想に傾倒しているダリスは、神性の秘密の探求を始めた。最初、彼女はシーカー ― ゴッドウォークンの捜索を託されたマギステルの部隊 ― と共に活動していた。しかしシーカーは悲惨な過ちと、それがもたらした… まあ、血まみれの大災害とでも言っておこう、その災害によって評判を落とした。そのすぐ後に、ダリスは神性教団の中心的信条を転向した ―― ゴッドウォークンの捜索は終わった。アレクサンダーが神となると宣言された。

噂によれば、教団の分派であるシーカーはゴッドウォークンの捜索を決然と続け、彼らが神となる支援をしているという。

種族

Wもしアレクサンダーが次の神にならないとすれば、誰がなるのだろうか？ エルフか？ ドワーフか？ リザードか？ これらのグループは永遠に、我らの次元で争い続ける定めであるようだ。無益な戦争と無謀な魔法の乱用は、宇宙開闢から我らの地を悩ませ続けている。現在、新たな大いなる脅威が広がりつつも、これらのグループは私欲に焼き尽くされ続けている。

思い起こせる限り、神人は神々に選ばれた戦士であるため、大部分の（全てではない）種族を当てにすることができる。神々が神人ルシアンの魂を受け入れ癒し、彼の指揮下において神性教団はかつてないほど密接な協力関係と相互理解を達成した。

しかし現在、古代帝国のリザードとの緊張が高まっている ―― 彼らは根源の魔術を大いに尊び、ヴォイドウォークンの問題に対する教団の手法を深く疑っているのだ。ドワーフの女王もまた、教団の動きを快く思っていないと噂されている（彼女がその思考を胸に秘めているとしても、ドワーフ王国はかつての王国とは違うのだ）。

取り分けドワーフ達は、神人のいない試練の時に直面しているようだ。そしてそれはリザード達も同じである。古代帝国の紫禁城の同僚とは、もはや秘密裏にも情報を交わすことができなくなったが、私もまだ決心できない事項が書かれた匿名の信書が、私の元へ数多く届いている。

リザード達が来たるべき戦争を恐れていることとは、すぐに推察することができる。恐らくそれは極めて近いだろう。我々が先の全てを費やした紛争の影響に未だ巻かれていることを考えれば、それは近すぎるのではないか。死の霧によって唖然とするような喪失を被り、故郷に帰れぬ難民として我らの土地を彷徨うエルフのことを考えれば。

失意の時代に、リヴェロンが誇り高く聡明な種族を失ってしまうのではないかと、私は恐れている。エルフに降りかかった非道は、多くの者への警鐘である。虚無に対して難攻不落な種族などない。いつ何時我らの誰かが、もしは我ら全員が、歴史書の乾き消えゆくインクに堕つるかも知れないのだ。この恐怖の時代はまだ明けたばかりなのではないかという恐ろしい予感を抱きながら、各種族の記録を ― 彼らの文化、生理、そして神秘を、ここに記す。

ヒューマン

ヒューマンはリヴェロンにおいて最も人口の多い種族であり、神性教団の出現以来、最も強大となっている。多才、独創性、そして日和見主義。ヒューマンはリヴェロンに広がり、全ての適所を満たす。我らはこの世界で最大の種族であるが、根源を封じ込めようとするマギステル達の近年の態度は、最も痛烈な分裂をもたらしたのだった。

生理

Wリヴェロンの他種族と比較したとき、我々は最も平均的な生き物に見えるかもしれない。最も背が高いわけでも、最も腕力が強いわけでも、最も長い寿命を持っているわけでもない。しかしヒューマンに欠けているであろう活力も、独創性、順応性、そして狡智によって十分に補われている。実際にリヴェロンの著名な地においてヒューマンを卓越した地位へと突き動かしたのは、それらの資質であろう。

統治

Hヒューマンの統治機構はドラゴン戦争時代の巨大な帝国から根源の時代の君主制、現代の神性教団の支配まで、地理と歴史を超えて広く変化してきた。

ヒューマンは他のどの種族よりも、物理的植民政策よりも文化的支配の傾向を発展させてきた。リヴェロン中に偏在することで、彼らの服飾、宗教、そしてエンターテイメントの基準は迅速に定着する ── かつて支配的だった文化を上回るほどに。ヒューマンの手法は広く普及し、彼らの中から強力な指導者を輩出し、リヴェロン全土から支援を受けることが可能であった。故にヒューマンは、他の種族が夢見ることしかできない方法で、この地を支配することができたのだ。我らが愛すべき先の神人ルシアンも、この説を補強している ── リザードの将軍やエルフの部族長は、ルシアンと同じ方法でリヴェロンを統一することはできなかっただろうと、筆者は愚考するものである。

ヒューマン

家族

Hヒューマンはコミュニティを重んずる緊密な氏族を為す。多くのヒューマンは生涯を同じ地で過ごすが、必要ならば仕事を求めて未踏の地を目指す者もいる。例えば母親や父親は家族を支えるために季節労働に従事し、数ヶ月間家を離れることがある。そのような家族はドワーフやリザードと比較して平等主義かつ革新的であり、伝統よりも適応性を重視している。

他のケースでは、人口過密によって、次世代が故郷となる新たな土地を求めることを余儀なくされることもある。この適応的な性質により、ヒューマンは異なる場所、様々な環境で繁栄することが容易なのだと言われている。彼らは多様な種族の中で繁栄し、元の文化に不満を引き起こすことなく影響力を増やしていった。ヒューマンの家族は丈夫な野生の花に似ている —— それは全く縁のない場所に根を張り、育つことができる。そしてわずかに背を向けている隙に、その場を支配していることに気付くことだろう。

新たな秩序

F先進性と順応性は、長らくヒューマンという種族の典型であった。変化は ― 時に劇的な変化は ― 我らの歴史を通して共通する特徴であろう。大半の者は我らのこの性質を肯定的な力と見ているが、必然的に進歩に抵抗する者もいる。この新たな方向性は、ヒューマンの自然な優位性から生まれたのだと言う者もいるが、他の者（私のような）は、この分断はヒューマンの生来の劣等感を解消し、我らの衰退へ繋がるのではないかと危惧している。ヒューマンは世界を支配する —— 我らが弱まれば、我らの領地も弱まるだろう。これを強く否定する者に、私、未熟な著者は懇願しよう。歴史を見るのだ、と。環境への適応こそが、ヒューマンを今日の支配的な力たらしめたのだ。

他種族や魔法を志す者への度を過ぎた迫害は、神性教団内に広がる腐敗の一例として高々と掲げられている。教団の対策が確かに芳しくないものであったとしても、それは適切な文脈の中で判断されることが重要である —— 根源の魔法が大きな争いをもたらし、古代帝国等が戦争の準備をしていると広く信じられている時代における、神性教団の階級制度的行動であるという文脈を。ヒューマンは何もせずに今日の栄華をもたらした地位を勝ち取ったわけではない。

その対策は過酷なものかもしれないが、彼らは成功もしているということを事例証拠が示している。先の大戦の終決につれて劣勢に立たされていた教団の軍勢は、見事に持ち直したのだ。もしアレクサンダー主教が彼らを動員すれば、彼はリヴェロンがまだ見ぬ巨大な武力を指揮することになるだろう。ヒューマンの衰退は時期尚早な予想ではないかと、筆者は確信している。全ての兆候が、アレクサンダー主教率いる神性教団の新たな黄金時代を指し示しているのだ。

リザード

大いに尊敬を集める久遠の古代帝国に大部分が住まうリザードは、文化的、資本的財産に富む誇り高さ（傲慢と言う者もいる）種族だ。競争的、実践的、そして伝統的。リザード達はその血筋から服飾、政治から神まで、卓越した自らに誇りを持っている。

生理

背が高くしなやかで一般的に誠実なリザード達は、多くのエネルギーと資金を自らの身体を管理し向上させることに費やす。平均身長6〜7フィート、平均体重130〜230ポンド。成熟したリザードは一般的にその個人を高みへと導くため、厳格な運動と栄養管理を注意深く実施して人生を過ごすこととなる。

リザードは冷血動物であり、卵から生まれる。だが彼らを下級な存在（蛇や爬虫類など）と比べることは、迅速な報復をもたらすことだろう。

リザード

古代帝国の社会

リザードの誇りは豊かで多様な文化と、この世界の他の者達よりも高度で安定した社会的、政治的システムから生じている。彼らの成功は強固な基盤にその枠組みを置いている。三つの主要な氏族からなる、三本脚の腰掛。すなわち戦争の氏族、法曹の氏族、そして夢想の氏族だ。

戦争の氏族

戦争の氏族によって振るわれる武力と影響を考慮すれば、リザードが攻撃的な種族であると考えるのも無理からぬことである。法曹の氏族が指名最高位であるにも関わらず、帝国はその支配者を戦争の氏族を構成する複雑で密接な貴族から選出する。その権力の座は宮殿と要塞の複雑な複合体である堂々たる紫禁城にあり、彼らはその場所から博愛と厳格さを持って帝国を統治している。彼らは人々が平和に暮らす基本的権利を脅かす者に対抗する用意が常にできており、侵略者には暴力的な憤怒と共に襲い掛かるであろう。

古代帝国において基本的権利は特権であると言及しておかなければならない。誰もが自由に、平和に生きる権利を持っているわけではない。事実、戦争の氏族は奴隷制度の砦であると、リヴェロン中で評判である。これは数千年前に「敵対的な外国人」の征服と共に始まった制度だ。契約した下僕は名目上は幸福であり、もはや祖先のように酷く虐待されることはないが、彼らは未だ奴隷として生まれ、あらゆる財産の権利を履行せずに（もしくは権利など持たずに）死ぬ。戦争の氏族では奴隷制度はもはや施行されていないと言うリザードがいるかもしれない。しかしそれは、リザードはもはや奴隷にならないという意味である。他の種族は未だに「格好の餌食」なのだ。

法曹の氏族

理論的には法曹の氏族は帝国において最高位の氏族であるが、実際的には彼らは強力な戦争の氏族のカウンターバランスとして機能している。この氏族は首都裁判所で終わらぬ議会を続け、法を制定し、修正し、帝国で行われたあらゆる違反行為に対して判断を下す。それがどんな些細なことであってもだ。好戦的な戦争の氏族を鎮めることは、法曹の氏族の外交手腕に掛かっている――そして歴史的に見て、彼らは目覚ましい成果を上げている。法曹の氏族の外交政策は、教育と貿易の流れを長らく奨励してきた――だが近年、この流れが細くなってきていることには、留意しなければならない。

夢想の氏族

夢想の氏族は夢の世界を意のままに旅することができる神秘主義者、夢想家による半宗教的機関だ。この奇妙な領域で、彼らは未来の真実と出会い、預言としてそれを持ち帰る。多くの卓越した夢想家が幸運の託宣者として仕え、多くの凡庸な夢想家が儲かるわけではない副業として占いを行っている。悪夢の闇の領域に挑む夢想家もいると言われているが、夢想の氏族の大半はこれを極度に無謀であると見なしている。そのような探求は確かに別世界の恩恵をもたらすが、夢想家が狂気や死に屈する危険性も跳ね上がるのだ。

夢想家は優艶な夕食に客を招くが、孤独に生きることを好む。夢想家と相互関係を結んだとしても金銭的な見返りは少なく、そもそも実現可能性の低いことだろう。

リザード

家族

Wリザードがつがいを選ぶ際は、見栄え、健康、地位、そして外交的手腕が重要な資質となる。気持ちなどは余分なものだと見なされている。潜在意識の熱情と他人を夢中にさせる魅力は、大半の者にとって理性に対する障害として取り扱われる。しかしながら、前述の要素によって知らされる好ましさは、「愛」という名前を付けて梱包され、よりロマンチックなリザードに売られることもある。

家族は、特に各祖先の血統の優位性を維持するための手段として、古代帝国において基本的な単位である。身体的、精神的または感情的な欠陥は、大いに恥ずべきものと考えられている。「奇妙な」子供は家系の評判を害し血統を濁らせるものとして、殺害してしまう親さえいる。

完璧という理想は血統から始まるが、それはリザードの家系のあらゆる側面に広がっている。親は物理的、理知的、社会的に優れることを子に押し付け、そして失敗の代償は大きなものとなる。これにより古代帝国は、世界で最も優れたアスリート、戦士、学者、芸術家を排出し、そして同時に法外な数の亡命者と、勘当された捨て子を生み出している。リザード社会における競争的熱意は頻繁に人目を集め、度々血まみれの抗争に発展し、その多くが法曹の氏族によって一時的に解決されるか、戦争の氏族によって恒久的に解決されるのである。

エルフ

先の大戦は全ての種族に荒廃をもたらしたが、この最も神秘的な人々 ― エルフ達より苦しんだ者はいない。

生理

Sほっそりとして優雅、そして背が高い（背筋を伸ばしたリザードよりも）エルフは、その比類なき不屈の精神においても有名である。この特性は祖先の森に姿を隠す傾向と相まって、彼らが異常に長く生きることを可能としている。一人のエルフの生涯が尽きるまで、幾多のヒューマン、ドワーフ、リザードの世代が過ぎ去ることだろう ―― もしそれが、尽きることがあるのならば。エルフは不死であり、殺されるまで死なないのだと言う者さえいる。そしてエルフを殺すということについては、程なく語ることとしよう。

エルフ

社会

Ｅエルフ社会の中心は、家族ではなく部族だ。エルフは彼らの森の中の結び目となる固く編み込まれた一団の中で暮らし、部外者に対して残虐であるという評判を注意深く醸成する。その森を彷徨う者は、悪意のあるなしに関係なく、古代の儀式においてエルフの名誉を受け、部族の最も神聖な食事に招待されるかもしれない。

残念ながら、この余所者はその大いなる名誉を覚えていることはないだろう。エルフ達が最大限に厳かに、敬意を表して食べるその食事は、疑うことを知らない旅人自身なのだから。

この行為は真の卑劣さから行われるものではなく、エルフが生まれることは非常に稀であり、互いの生命を心から大切に保護しているが故である。エルフ達は彼らの問題に部外者が介入することを思いとどまらせ、取り返しのつかない喪失へと至る血まみれの紛争を防ぐことを願っているのだ。エルフは自然界との繋がり、物語と芸術、儀式、そしてコミュニティを重んじている。部族間の紛争は常に外交的に解決され、エルフの社会において犯罪はほとんど前例がない。一部のエルフは部族単位を離れ、世界主義的な地域へ乗り出すことを選択する。そこでは彼らの言語的および文化的差異が、多くの伝統的な専門家を阻む。そのような場合は、エルフが生き残るために犯罪に訴えることも、全く無いわけではない。

記憶と言語

Ａ長く生きる生物として、エルフは集団的な記憶を最も重んじる。彼らは森を祖先の記憶の霊的な貯蔵庫と見なし、貴重な物語が死ぬことなく再び語られるように、友や敵の肉体を喰らう。彼らは思い出の番人、知識の守護者、追憶の収集家なのである。

エルフ

埋葬文化

エルフの社会では死は相対的に珍しく、大々的で物憂げな儀式によって彩られる。彼らの世界では、生命と記憶の器である肉体が最も重要である。身体と血液は最大限の尊厳をもって扱われる ―― 心臓は喰い尽くされ、そして死体は血の穴に投げ込まれ、そこで根を張り樹木となる。このようにしてエルフは祖先に囲まれる ―― 森は彼らの故郷であり、そして歴史でもあるのだ。

　エルフの歴史の大半において死は珍しいものであったが、近年徹底的で致命的な軍勢となって、この気高き住民達を襲ったのであった。

壊滅

先の戦争の最後の最も大きな衝突は、エルフの故郷をその劇場とした。弱体化した神性教団によって、ルシアンはブラックリング軍をその森におびき寄せた。ダミアンはその場所で父親を破壊し戦争を終らせる最後の痛撃を指揮することを期待していた。だがブラックリングがエルフの首都を包囲したその時、ルシアンの使者が卓越した恐ろしい兵器を解き放った――触れるもの全てに死をもたらす極悪非道なる霧を。死の霧はブラックリングに押し寄せ、その全てを殺し、大戦は終わった。しかし霧は多数のエルフをも殺害し、かつて青々としたエルフの故郷は破滅の地へと変わった。エルフの死体は埋められることなく、未だそこに残されている。

　現在エルフは絶滅の危機に瀕し、世界を彷徨っている。彼らの文化は失われた。僅かな森が残ったが、それは急速に縮小している。エルフは姿を消し、彼らを救おうとする他種族はいないようだ。

　幾つかの報告書から、一部のエルフが再集結し、彼らの未来のために残された勢力を集めていることが示唆されている。噂がエルフ達の頭を上げさせ、戦わせようとしている。

一つの言葉が、風に乗って運ばれてきた。

「サイオン」

ドワーフ

彼らの王国は誇り高き無能な女王によって没落し、その優秀な市民の多くは他種族の土地で働いている。そして彼らの領土は、徐々に攻撃的になる神性教団の脅威に晒されている。彼らと話すと感じないかもしれないが、ドワーフは瀬戸際にいる者達なのだ。

生理

彼らは他の全種族より小さい（勿論、インプを除いて）が、ドワーフがリザードやエルフより肉体的に劣ると思っていはならない（あるいは、高い棚から物を取り出すことになるまでは）。それぞれのドワーフはその短くずんぐりとした骨格に、大量の力を蓄えている。

彼らは一般的に4から（稀に）5フィートの背丈だが、体重は大抵150から250ポンドである。

何年にも渡って、ドワーフは自らが優れた戦士だと証明してきた。彼らは近接戦闘で重い一撃をお見舞いし、大きな弓の手に負えない弦に恐ろしい力を溜めることができる。あまり知られておらず、そして広く吹聴されていないのが、彼らの歩みの軽さだ。でっぷりとした外見からは思いもしないだろうが、彼らがその気になれば、最も鈍重なドワーフでさえ部屋を静かに横切ることができる。悲しいかな、その才能は彼らの一部に犯罪の味を覚えさせてしまっている。

ドワーフ

王国

Iドワーフ王国の歴史は、誇りと恥辱の源だ ― ドワーフ達は素早く前者を解説し、後者を認めるのを渋るとしても。饒舌になったとき、それはよくあることだが、彼らはかつて共に暮らしていた最愛の神デュナの自慢を、そして彼らの王家の血筋が遥々初代の王テナックスまで遡ることができるという自慢話を続ける。テナックスと彼の時代のドワーフ全員が奴隷であったことについては、それほど自慢したがらない。その奴隷達が戦い、自由を勝ち取ったことは誇りの源になるはずだ。だが奴隷制度の染みは、この誇り高く傲慢な民にいつまでも残っている。生まれながらの奴隷の反乱よりも、彼らの王国が他のどの強力な種族にも比肩するほど成長したことの方が、彼らにとってはより好ましい歴史的焦点なのだ ―― そしてドワーフが力、富、栄光において、古代帝国に匹敵する時代があったことは確かだ。

しかしその時代は遥か昔に過ぎ去り、現在のドワーフ女王ジャスティニアは、祖先ほどの統治者ではない ―― 一連の屈辱的な軍事的敗北により、ドワーフ「王国」は都市よりも小さな状態となった。ドワーフ達は未だ猛烈に女王と王国に対して忠実であるが、その多くが、国土の存在自体が戦斧の刃の縁で揺れ動いていると感じている。

社会

W王国には貴族階級が伴う ―― その名が富と権力と同義であり、また何世代も続くようなドワーフの一族だ。貴族階級には平民階級が伴う。各々の業界以外ではその家名が意味をなさない、労働者と商人達だ。平民に付随するのが犯罪階級だ ―― 酒場の暗い片隅でその名が密かに語られる盗賊、密輸業者、強奪者や海賊達だ（その酒場では値上がりし続ける主人の「保護税」によって、ビールは法外な値段となっているだろう）。

ドワーフの階級構造は強固であり、階級間の移動は殆ど前例がない。この区分けは彼らのアクセントによってはっきり聞き分けることができる。貴族階級の者ははっきりとした控えめな口調で話し、一方でより一般的なドワーフはそのカジュアルな、時には下品な喋り方で知られている。これほど階級に重きを置いているにもかかわらず、ドワーフは商売を高く評価している。

ドワーフは間違いなく全種族で最もビジネスに精通しており、彼らの政治的な王国が先細りしている一方で、一部のドワーフは依然として強力な商業帝国を誇っている。強力な商人の階級が、ますます力を失っていく貴族階級とどのような相互作用を引き起こすのか、我々はまだ目にしていない。

ドワーフ

反乱

Aしかしながら、こう言わねばならない。全ての貴族が無力なわけではないと。王国内でますます厄介な立場になったことで、上級階級のドワーフの一部が、女王を打ち破り、恐らく歴史上初めて王統を二分し、君主をすげ替えて「王国を救う」ための秘密結社を結成したと思われている。彼らにとって悲しいことに反乱は失敗し、その指導者を除く全員が処刑された（この生存者は特別な罰として、酷く恐ろしい場所へと追放された）。

移民

P多くのドワーフが他の土地に機会を求めて故郷を離れたことは、恐らく驚くことではないだろう。故郷で餓死するか国外で働くかという選択を迫られ、多くの者がヒューマンの土地で働くために国を去った。彼らは大半のヒューマンがやりたがらない仕事をこなし、置き去りにした王国に未だ焦がれながら、安価な単純労働力を提供している。

成功と、そして富さえ見出した者もいる。この移民の波は多くの者に深く屈辱的だと見なされている一方で、一部のドワーフは、彼らが慣れ親しんでいるように、人目を忍ぶネットワークを形成している。これらの犯罪者達はその地の当局とイタチごっこを続けているが、その犯罪者を調査するマギステルはドワーフの施設に立ち入るやいなや、沈黙の壁に阻まれることになるだろう。ドワーフ達は、自らを守っているのである。

影の者達

W死者が常に横たわり続けているわけではないことは、遥か昔から知られている。ブラッカス・レックスの軍勢は、そして最近では汚らわしきブラックリングは、倒れた者達を ― そして彼らの犠牲者を ― 再び戦うために立ち上がらせることに大きな喜びを見出していた。卑劣な死霊術師の指揮により、よろめき近付いてくる友人、家族、そして愛する人を目撃した時に発せられた恐怖の叫び声は、何世代にも渡って響き続けている。多くの怯えた村人達が、暴れまわる骸骨の群れがリヴェロン中の農地を略奪し、燃やすさまを見たと主張している。それら略奪者はその地に恐怖を植え付け、そして多くの場合、より大きな軍勢の先駆けとなる。だがしかし、その死者はただの糸に吊るされた人形以上のものかもしれないという考えは、恐ろしいものではないだろうか？

野生に隠れ潜む生きた骸骨の物語がある。喋り、考え、恐怖を感じる能力を持つと言われる生き物たち。噂によれば、彼らは社会から拒絶される恐怖から逃れ、流浪の身になるのだという。これは真実かもしれない ― もしくは完全に空想かもしれない ― しかし他にも噂がある。より憂慮すべき噂が。

恐らく諸君も、フェロール公爵の醜聞を耳にしたことがあるのではないか？ 数日間姿を消し、ただ妻と子供に対して冷たく冷淡になって戻ってきたという話を。彼は数ヶ月にわたって自分の書斎に閉じこもり、自分の書籍を執拗に調べていた。その書斎が全焼し、永遠に消滅するまで。彼は愛人と駆け落ちしたのだと言う者も、正気を失ったのだと言う者も、金を借りていたドワーフ達に殺されたのだと言う者さえいる。彼の女中は異なる物語を伝えている。

彼女の説明によれば、公爵夫人が彼に立ち向かい ― 彼を攻撃し ― それが夫の皮を被った骸骨のアンデッドでしかないことを明らかにしたのだという。彼女は彼の顔から仮面が剥がれ落ち、その真の姿が顕になるさまを目撃したと誓った。それは永遠の笑みをたたえた、骨のように白い死に顔だったと。

死者が歩くのであれば、我々は滅びる運命にあるのかもしれない ―― もしくは、まだ希望は残されているのかもしれない。いずれにせよ、新たな神人が現れた方が良いことは確かだろう。私は誰かが新たな神人となることを祈っている。彼らがすべきことをできるのであれば、ドワーフでもエルフでも ― リザードでさえも ― 我慢しよう。

我々の運命は全てがそれにかかっている。それでは私は、現在までの物語の詳述を終わることにしよう。私の知り得る限りのことを、語り得る限り伝えたはずだ。歴史は、今日の世界を創り上げるために行われた偉業を記録している。歴史が、この世界を存続させるための未だ来たらぬ偉業をも、記録せんことを。

この世界の全ての階級と種族の著名な人物の肖像

—抄録—

S勿論、過去の時代を調べることは宜しく結構だ。しかし今日の世界についてはどうだろう？ そしてその世界を旅し、宮殿と酒場に等しく魂を吹き込む人々については？ 王子も乞食も、商人も傭兵も、皆がこのリヴェロンに足跡を残している。後世のために彼らの物語を残らず記すことができれば、どれほど良いことか。だがそのような国勢調査には、数世紀を要するだろう。

その代りに、私は自分のノートを眺め、最も注目すべきであろう者達の記録を見つけた。それはリヴェロンの高等貴族のリストに過ぎないと予想する者もいるかも知れないが、彼らが歴史を形作る一方で、その歴史を生きなければならないのは、この地の平凡な人々なのだ。それ故、私はこの世界を共有する人々の完璧な肖像を諸君に提供するために、私の人生の散策から標本を選ぶことにした。彼らの大半が私の人生を豊かなものにしてくれた。諸君がリヴェロンを横断する際に、同様の財産を見つけられることを願っている。

レッドプリンス

もし私がリヴェロンの魅力的な人物の話をレッドプリンス以外の者から始めたとしたら、それは怠慢に他ならないであろう。彼は古代帝国の外ではあまり知られていないかも知れないが、正当な範囲内において彼の名は神秘と、勝利と、魅力と、そして — 何よりも — 恥辱と同義である。

Dその結末にもかかわらず、彼の物語は前途有望に始まった。封じられた紫禁城で育った史上唯一の緋色のリザード — それは確かに伝説の類である！

戦士の氏族の王室に産まれ、この若き王子は帝国を青雲へと導く運命にあるようであった。彼はその生涯を、氏族の王家のための宮殿の巨大な複合体である封鎖された紫禁城で過ごしていた。彼は全てに秀でていた — 夜空のどんな星の名もそらんじ、帝国の最高の闘士を相手取り、どんな紛争にも裁きを下すことができた。彼がその気になれば、火と水を調停させることさえできると言われていた。法曹の氏族でさえ自らの誇りを飲み込み、彼は勇敢であるのと同じくらい洞察に満ちていると認めざるを得なかった。

しかし勿論、彼が最も知られていたのはその数多の戦いであろう。それらの多くは、何世代にも渡って歴史年代記の中で鳴り響くことだろう — 竜脊山脈の奇襲、フェロル平原の戦い、ヒブルヘイム侵攻。昔々、「レッドプリンス」は勝利の隠語であった — 二重の意味で、彼は戦場に足を踏み入れたことはなかったからだ。何と言っても、将軍達が地図を携えて彼のもとを訪れ地勢を説明し、どう勝利するのが最善なのか玉座の間の彼から聞き出すのであれば、彼に天蓋や泥土は必要であろうか？ 彼の勝利（時には不可能な勝算に対して）は、それらが血まみれであるのと同じくらい伝説的だ。斯様に彼の名声は、悪名高いほどに大きい。

では、どこで道を誤ったのだろうか？ ああ、それを知ることができればどれほど良いだろう。謀殺、情事、あるいは危険な根源魔法に関する物語がある。時にはそれらが一体となることも！ 彼は悪魔と血盟を結んだのだと言う者も、祝福されしルシアンの死に加担したのだと言う者もいる。私が確かに言えるのは、彼が玉座を失い帝国を追放されたということだけだ。いつの日か我々は真実を知ることができるかも知れない。しかし今のところ、彼の秘密は固く閉ざされている。

『彼は悪魔と血盟を結んだのだと言う者も、祝福されしルシアンの死に加担したのだと言う者もいる』

ビースト

私は彼に会ったことがないが、ビーストと呼ばれる人物を取り巻く物語は、典型的な内緒話よりも遥かに鮮やかな絵を描いている。私が確かに知っていることは、以下の通りだ。

ビーストとなる以前、彼はドワーフ社会の中で良好な立場を持つ貴族であった。彼の生まれに関する疑念は多かったが、彼を中傷する者でさえ、その強い道徳心を否定することはできなかった。

しかしすぐに、試練の時が訪れた。急速に拡大する古代帝国と神性教団の領土の板挟みになった女王は無謀さを増し、無数の民間人の生命が無為に失われることとなる無謀な軍事行動を命じ始めたのだ。

我らが英雄に率いられた平民達が宮殿へと押し寄せ、女王の退位を要求した。しかし彼女の支持者は多く、反乱は即座に鎮圧され、まだビーストと名付けられていない男は霧の島へと追放された。彼がその島でどれほどの時を過ごしたのかは分からない。だがこれだけは分かる。彼は生き残った。程なく彼は島に停泊していた王家の船を奪ったのだ。その船員であった、かつての反逆者達の助けを借りて。

報告書によれば、彼の顔はあまりにも傷つき汚れ、彼の髪はあまりにも野放図に伸び、彼に降り掛かった自然の猛威はあまりにも明確であったため、同志は彼のことを殆ど認識できなかったようだ。しかし最も際立った変化は、渦を巻き、艶があり、輝く貝殻や銀貨や雲母の欠片で飾られた、長く立派な髭を生やしていたことである。

彼はそれをこう説明した。「自然に分け入るときは、自然に奪われねえもんを見つけなきゃならん。獣を演じるとしても、魂はまだ自分のもんだ」。

こうしてビーストと乗員達は外洋へと赴き、王室艦隊とマギステルの軍艦に対する復讐を開始した。しかし、自由は短いものであった。マギステルの戦艦をかいくぐる際にビーストは風を操り、彼は根源の魔術師であることが明らかとなった。この予期せぬ力はあまりに無秩序であり、彼の船は崩壊した。船員は失われ、そして彼はマギステルによって荒れ狂う海から引き上げられた。その後の報告書は未だ確認中であるが、想像できる結末は二つだけだろう。そのまま殺されたか… フォートジョイへ送られたかだ。

『自然に分け入るときは、自然に奪われねえもんを見つけなきゃならん』

ローゼ

ローゼを知らずに大衆芸術について議論することは、不可能だろう。

S彼女の音楽は耳障りであり、楽しめないほど当惑すると述べる者もいる。しかし彼女のファンは、彼女の音楽は自分自身の外へと連れて行ってくれると言う。音楽を聴いている領域から、彼らが言うには、超越した領域へと。

ローゼの才能は不穏な源に — 恐らく別世界に — 由来するのだという噂もあった。好奇心を刺激された私はその核心に迫るため、若手スターとの会合を整えた。偶然にもそのインタビューの日 — 昨年のルシアンの日 — は、ローゼが公の場に現れた最後の日となった。

私はあの運命の出来事の直前に、彼女に会っていたのだ。彼女は予想していたよりも背が高く、瞳は黒く、臆面もなく汚い髪を広げていた。私は簡単な質問から始めた。彼女はどうやって、それほど熱心な支持者を引き込むのだ？

「みんなが私の音楽を好きなのは、それが本物だからよ」。彼女は言った。「頭の中に聞こえるのを、直接翻訳したものなの。愛や芸術や雑音みたいな、価値あるなにか — 感情は抑えるべきじゃないのよ」。

前述の噂について、ローゼは快く答えた。「ええ、本当よ。私は宿主なの。ずっとね。妖精に幽霊に悪魔に... 彼らは子供の頃から来てたわ。私の行動の多くは、眼の裏の会話から来てるのよ」。

その夜の演奏の最中、やがて聴衆が音楽に合わせて身体を動かし始めた時、何かが彼らを襲った。ローゼの根源が、恐らく偶然に、演奏の間に現れ、そして聴衆は獣のように互いを引っかき始めた。友人が友人に対して、恋人が恋人に対して。幸運にもそれは始まってすぐに収まり、重大な怪我は報告されなかった。彼女はその後、直接フォートジョイへと連れ去られた。

しかしながら彼女のファンは、この期待の星の最期を目にしたわけではないと、希望を持ち続けている。包帯を巻いた常連客の一人が、逮捕の後に私に話した。「彼女は戻ってくるさ。あんな人が、ただ消え去るわけがない」。

『愛や芸術や雑音みたいな、価値あるなにか — 感情は抑えるべきじゃないのよ』

イファン・ベン・メッズ

私は海岸では財宝が見つかると聞かされてきたが、気にも留めていなかった。とはいうものの、ドリフトウッドの近くの海岸で、しゃがみ込んで海を見つめているお宝を見つけたのだった。彼の名前？ イファン・ベン・メッズだ。

皆と同じように、私もこの男の話を聞いていた―ルシアン軍の一人として、神人を守ることに生涯を捧げた敬虔なクルセイダーとして、ブラックリングを打ち砕いた戦争の英雄だ。しかしながら、私が出会った男は違っていた…

彼にその古い称号で挨拶した時、彼は顔を歪めて笑った。今はルシアンの息子に―アレクサンダー主教に仕えているのか聞いた時、彼は再び笑った。今度は腹の底から。現在のベンメッズは悪名高い孤狼団とつるみ、傭兵として働いているようだ。私が聞いた物語を、諸君に語らせて欲しい。居酒屋の暖炉脇の心温かい話ではなく、篝火の衛兵が見張りの直前に語るような恐ろしいものを。標的にされた男達が、「シルバー・クロウ」が彼らを追っていると聞いたその日に、静脈を空にして発見された物語を。動物のように獲物を追跡する傭兵の物語を。不可能な暗殺を成し遂げる、奇怪な狼の物語を。

全力を尽くしても、私はこの緑眼の男に、それらの物語を肯定させることも否定させることもできなかった。彼は単に犬歯をむき出しにして、どんな男にも値打ちがあるのだと語った。振り返ってみると、私はあの吹きさらしの浜辺で、なぜ恐怖を感じなかったのか分からない。私は、今なら疑いようもなく知っている、この地で最も危険な男の一人にせがんでいたのだ。彼の中に、まだ名誉の意識があると感じていたのかもしれない。もしくはシルバー・クロウが私の命に対して請求する金額を支払おうとする者など、この世にいないと知っていたからかもしれない。

私はしばらく彼と話し、彼の過去を（もしくは未来を）引き出そうとしたが、彼は私の質問を巧みに躱していた。

彼が語ったことはとても少なかったが、その瞳の中には獰猛な生気があった。彼は隠しておきたくないのだという直感。恐らく状況が変われば、彼の物語が語られることもあるだろう。

『私もこの男の話を聞いていた―ルシアン軍の一人として、ブラックリングを打ち砕いた戦争の英雄だ』

セヴィル

認めよう。エルフは私にとって、常に不可解だと。勿論、彼らには感服するとも！彼らは美貌と粗暴、愛嬌と超俗、強健と脆弱の奇妙な混合物なのだから。

I私がサイゼアルの市場で最後に会ったエルフは、セヴィルという名の若々しい女性だ。彼女は顔に興味深いタトゥーを帯び、それを会話に入り込むための言い訳に使っていた。始まりは些か… 冷ややかなものであった。しかし最終的に、彼女は故郷の祖先の森で育った記憶を私に語る気になってくれた。確かに彼女は幾分自分の記憶に — あえて言えば — 執着しているように見えた。それを完璧な正確さで思い出し、何も忘れていないと保証することで。

彼女は不本意ながら故郷を離れ、古代帝国へと連れて行かれ、そこであまり有名ではない氏族の者のために働いていたと話した。私はリザードの奴隷趣味については聞いていたが、勿論それ以上立ち入らなかった。私は彼女が今この地を放浪し、もうリザードと関わっていないことが嬉しいと弁明した。「あら、いいえ」。彼女は訂正した。「まだ解決すべき関係があるのよ」。その時点で、彼女はかなり大きな針を指でくるくると回していたため、私は会話を先へ進めるのが最善だと考えた。

我々はかなり長い間会話を続け、やがて私は彼女のローブのへりのすぐ下に別のタトゥーが、男の名前が、あることに気付いた。我々の応酬はとても自然に流れ始め、そんな名誉に値するとはなんと幸運な男だろうという冗談を言えるほどの気楽さを感じた。私は自分自身の最愛の人の名前のタトゥーを見せるために袖を上げようとしたところだったが、彼女は背を向け、何も言わずに歩き去ったのだった。

そしてこれが、全くのエルフなのだ。

本当に、なんと奇妙な人々だろう…

『彼女は顔に興味深いタトゥーを帯び、それを会話に入り込むための言い訳に使っていた』

マイスター・シヴァァ

アークスの大聖堂の外でマイスターと面会した私は、明確な不満を抱くことになった。私が彼女に、その物語を記録する栄誉に浴することはできるだろうかと尋ねるやいなや、彼女は私が貞操の誓いを立てているのかどうかを知りたがった。不意を突かれた私が否定すると、彼女は提案した。もしそうなら遠慮なくどうぞ… 言葉では表せない行為を、独りでしに行けばいいと。

彼女の舌鋒を経験したのは、私だけではないだろう。私がこのリザードについて知ることの多くは、彼女が侮辱し、卑しめ、咎めた人々との会話から手に入れたものだ。しかしながら、その証言は興味深い絵を描いている。

彼女の物語は夢想の氏族から始まり、そこでは彼女は才能ある生徒だったようだ。しかし勉学に飽きた彼女は帝国を離れ、ブラックリングとの戦いの最中に教団に加わった。

彼女が冷酷、打算的、無慈悲という評価を得たのは、それが犠牲にするよりも多くの命を救うことが明確になるより遥かに以前のことである。早晩、ルシアンは彼女を、魔法使いの賢人であるマイスターの地位へと昇格させた。

戦争が終わり、ブラックリングが霧散し、そして悲しいかな、神人ルシアンが残響の大広間に向かい、マイスター・シヴァは軍隊において彼女を際立たせていた研ぎ澄まされた知力と断固とした態度を以て、政治を始めた。このアプローチは、彼女に数多くの友人をもたらすことはなかったと言ってもいいだろう（実際、私の情報源によれば、彼女は権力内のほぼ全員の神経を苛立たせ、そしてそれを楽しんでいたそうだ）。

ルシアンが死に、他のゴッドウォークンが現れると、その段階でシヴァは「シーカー」と呼ばれる小さな秘密主義の集団を引き受けた。彼女はその潜在的な神人の発見、保護、そして教育に着手し始めた（間違いなく、彼女がアークスを離れてリヴェロンを彷徨うのは素晴らしいアイデアだと考えた者達の、後押しによるものだろう）。この状況は、一般的に「ミステイク」として知られるゴッドウォークンにより一変した。シーカーは解散し、シヴァは汚名を負った。

私はこの弁舌鋭い除け者に何が起きたのか知っている、と言えれば良かったのだが、彼女は殆ど消滅してしまったかのようだ。彼女がどこにいようとも、その凋落の記憶だけをお似合いの相手として、失意の生活を送っていることを願っている。

『彼女は提案した。もしそうなら遠慮なくどうぞ… 言葉では表せない行為を、独りでしに行けばいいと』

かつては有名なシーカーであったマイスター・シヴァの権力からの転落は、流星のようであった（すなわち周囲の全てにとって、素早くそして壊滅的であった）。

シーカー・ガレス

かつて私はここアークスで、ルシアンの日の物資を大聖堂へ運ぶ荷車が壊れているところに出くわしたことがある。一人のパラディンが寝そべり、白い外套を泥で汚し、休んでいる御者に見守られながら車軸を直すのを手伝っていた。そのパラディンが神性教団の最高位のシーカーの一人だと気付いた時の私の驚きを想像して欲しい！ 彼は外套から泥を落としながら、その姿を謝罪する豪胆ささえ見せ、ガレスだと自己紹介をした。ほんの数ヶ月後、シーカーの名も同様に泥にまみれることになるのだが、それでもガレスは数少ない潔白な者の一人であろう。

彼らを内包するこの世界はいいものだと感じさせてくれるような人物に出会うことは、よくあることではない。

彼は敬虔かつ勇敢であることで知られている（あえて言えば、更に極めてハンサムだ！）。彼は自分の主張が正義だと信じるときに刃を振るい、同僚の中でその剣と魂の強さは有名である。

嬉しいことに、彼がどのようにしてシーカーに加わり、ゴッドウォークンを探しそして守ることに魂を注ぐことになったのかを語る男と、食事を共にする機会を得た。

彼はゴッドウォークン達に食事を与え、衣服を与え、彼らを導き、信頼したという。彼が貢献した者達の中からミステイクが舞い上がった時の彼の困惑は、私には想像することしかできない。

ミステイクの混乱が静まった後、私は再び彼を探そうとした。しかしそれは遅すぎた。パラディンの同僚は、彼はマイスター・シヴァと共にアークスを離れ、その後の消息を聞いた者はいないと語った。

彼がどこにいるとしても、彼が何をしているとしても ― 私は彼とこの世界を分かち合っていることを有り難く思う。彼が今でもリヴェロンを旅し、恵まれない者達を助け続けていることは疑いようがない。

もし諸君が彼に出会うほど幸運であれば、その外套が汚れていたとしても、彼の魂にはシミひとつないであろう。

マラディ

魅力と知性と美貌と、底の知れない脅威を同時に発散させる人物に会うことは稀だ。しかしマラディというエルフは、それを優雅に冷静にやってのける。

私はアークスで、シーカーが解体された直後に彼女に出会った。彼女は、友人と会い、ビジネスを行うためにそこにいるのだと話した。彼女は私の興味を引き付けた。そのような人物は少ない。彼女は明らかにエルフだが、私が出会ったどのエルフとも大きく異なる何かがあった。彼女の言葉は不自然さの欠片もなく易々と流れ、彼女の笑顔は魅力的であり、彼女の歯は不自然に鋭いように見えた。彼女は顔の半分を覆う仮面をつけていたが、自身に何が起きたのか話すことは拒んだ。「生まれつきよ」。そして手を振る彼女が、私が手に入れた返答の全てだ。

彼女のスタイルは独特だった。その話し方は宮廷の女性ほどに上品だが、残忍な見た目の二又の槍を背負っていたのだ。彼女が戦っていたことは明らかだったが、どこで戦っていたのか、そして誰と戦っていたのか、彼女は明かさなかった。

彼女が明らかにしたのは、その笑みと、「戦争は地獄よ」という言葉だけだ。あるいは — …少なくとも、私は彼女がそう言ったと信じている。翌朝の私の記憶は、いくぶん漠然としていた。我々はドワーフ・レッドの四本目を空けるべきではなかったのだろう。彼女の知性はどんな短剣よりも鋭く、彼女の笑い声はどんなワインよりも酔うものであった。我々は長い夜を酒を飲み、語り合って過ごした。彼女は十分に話したと思う。その物語はどれも魅力的であり、そして同等に愉快であった。そしてそれでも、その演説にもかかわらず、彼女が私の胸から全ての秘密を取り出した一方で、彼女は完璧で完全な秘密を残しているのではないかという疑念を振り払うことができなかった。

『彼女の知性はどんな短剣よりも鋭く、彼女の笑い声はどんなワインよりも酔うものだった』

タルクィン

しかしながら、全ての物語が善いものとは限らない。無論、感動を与える者や意欲的な者にはすべからく価値がある。しかし他の者達は？ 彼らは、避けるべき道の警告として資するのみである。

例えば、タルクィンの物語を取り上げてみよう。彼の古い教師達によれば（ドラゴン・ブリュー・エールの二杯目を空けた頃には、彼らは極めて饒舌になっていた）、タルクィンはギルドの代々の生徒の中で、最も快活であった。彼は貧しい生まれであり、健康障害に苦しみ、そして学業成績に関しては信じされないほど優秀であった。それまでは独学であったようだが、それにも関わらず彼は上級講師のための試験に合格して入学したのだ。どれだけ控えめに言っても、彼は偉大なる運命にあると目されていた。

彼は勉学に優秀である一方で、限度を踏み越え過ぎるという評判も広まった。彼は自分で計画した実験を実行するために、夜中にギルドホールに侵入したところを何度も捕まっている。彼を追放から救っていたのは、その恐るべき学術的才能だけである。

血気盛んな彼は、科学と魔法の正道を外れた領域を探求し続けていく。最終的に、悪魔的存在の召喚と死肉の蘇生を試みていることが発覚し、彼はギルドから追放された。

このような冒涜的な術に手を出した者は、通常は地下牢へと放り込まれることになる。しかしながら、恐らく彼の技術に対する敬意の最後の表明として、タルクィンは立ち去ることを許されたのだった。背後で扉が閉まりながら、彼は二度と学術の学び舎を陰らせるなと警告を受けた。

実際に、この若者は自らの前途を浪費し、禁じられた知識に干渉することを楽しんでいたようだ。私の調査により、リヴェロン中の幾つか地元当局のから、ブラッドマジックと死霊術に関する報告書が発掘された。あるマギステルは、「地元の墓地に対する逸脱した干渉」の罪で彼を逮捕している。続いて行われた尋問の詳細な記録からは、闇の野心と異端な思考に打ち負けた、悲壮な若者の心が垣間見える。

「この世界で価値あるものは全て定命者によるものだと、お前は分からないのか？ 神々など、ハゲタカのように我々の成果に支えられているに過ぎない。奴らにあるのは、あの世などという約束だけだ。私が死の世界を取り除けば、山師共が我々にできることなどない」。

この言葉が記録された直後、タルクィンは極めて異常な拘留状態から脱走を果たした。その後の彼を知る者はいない。故にこの気の毒な物語は、我々全員の警告としよう。リヴェロンで最も快活な者でさえ、堕落には脆弱なのである。

『神々などハゲタカのように我々の成果に支えられているに過ぎない』

語られぬ物語

S勿論、我々が二度と聞くことができないであろう物語も数多い。私は死者を嘆く。彼らがこの世界を去ったからではなく、その生涯の物語を持ち去ったからである。世界の無数の物語の編み目を眺め、そしてその織り糸の多数は永遠に語られることがないと知るのは、確かに苦い水薬である。

例えば、ある若者の物語を見てみよう... 私が彼を「紳士」と呼ぶ理由はすぐに明らかになる。私には、彼を他になんと呼べばいいか分からない。ある雨の午後、道端の宿屋で食事をしているところに通りかかったこの若い... 男と... 私は僅かな言葉を交わした。私が彼を男だと言うのはその声を聞いたからであり、若いと言うのはその機敏で優雅な動きを見たからだ。しかし実際、彼は独特の外衣を身に着けており、その顔つきは深い影の中にあった。私が彼の名前を求めると、彼は一言「フェイン」と返した。私は彼を食事と会話と飲酒に誘ったのだが、その細すぎる体躯にも関わらず、彼には食欲がなかったようだ。私がもう一度誘うと、彼は頭をこちらに向け — そして初めて、私はそのフードの下の顔を目撃した。少なくとも、私はそれが顔だったと信じている。私の一部は、その顔はドワーフだったと言う。そして残りの部分は、彼は実際はエルフだったと言うのだ。記憶には欠陥がある。恐らくワインのせいだろう。奇妙なことに、私はそのフードの下のリザードの鼻の明確な記憶をも持ち合わせている。諸君には馬鹿げた話に聞こえるだろう。実際にその場にいた私にとっては、さらに可笑しな話なのである。確実なことは、その旅人には僅かな感情の痕跡もなかったことだけだ — まるで実際は、仮面をつけていたかのように。

彼は礼儀正しく、しかしこの身元不明の生き物は、明らかに孤独を望んでいた。私は彼を独りにさせた。

私は興味をそそられたことを、そして今も興味を惹かれて続けていることを告白しよう。私はフェインの物語を聞きたいと、心から願っている。この捉えどころのない人格の真実を知りたくてうずいていた。しかし悲しいかな、彼はこの羽根ペンに、その物語を歴史に記させてはくれなかった。この哀れな少年は、自分がどれほど不滅に近付いていたのか、全く知らないのである。

『フェインと名乗った彼は独特な外衣をまとい、顔を完全に隠していた』

適度に知的な者のための魔法とスキルガイド

W 我々が自然の世界に対する完璧に近い十分な理解を得られたとしても、我々を困惑させる超自然的な世界は依然として存在する。我々は全ての魔法は神々の存在から流れてくることは知っているが、多くの民衆にとって、その実態は未だ神秘に包まれている。

このガイドは魔法の主要な系統を説明し、全ての読者に、それらの魔法で何が可能であるかの理解を提供するものである。

当然ながら、呪文を唱える方法自体を諸君に伝授することはない。それは熟練者の手においても何年もの訓練を要するものであり、教師のない初学者の手においては極めて危険である。

魔法のための理知がない者のために、魔法ではないスキルセットも加えておいた。魔法好きにとっては平凡なものであるが、それらのスキルは平均的な市民を遥かに超える能力を諸君に授けることだろう。

これらのページの中には、根源に関する記載はない。それは教えられることのできない力だからだ。それは、振るわれることしかできない力なのだ。

風術

A風が木々を揺らすのを聞いた時や、髪を乱すのを感じた時、それは優しい力であるように思えるかも知れない。しかし熟練の風術師の手によれば、烈火の如く致命的なものになり得る。風が吹き屋根が震えた時、それは世界が家を引き裂こうとしているのか、それとも風術が働いているのか、諸君は知りたがることだろう。

風術師は制御と運動の支配者だ。彼らは相手を電流の渦で縛りつけ、あるいは巧みなテレポテーションによって戦場の何処へでも投げ飛ばすことができる。そして接近することが可能な敵であっても、これらの希薄な魔法使いに一撃を喰らわせるのは至難の業だ。

しかしこの魔法を極めた者にとって、その用途は戦闘にとどまらない。テレポートできるのであれば、なぜ川を泳いで渡る必要がある？ 氷を四方にまき散らすことができるのであれば、なぜ凍った道に転ぶ危険があるだろう？ 風が運んでくれるなら、なぜ歩く必要が？

周囲の風を制御することができ始めるまでには何年もの訓練が必要だが、崖から身を翻したときに風が自発的に手を差し伸べてくるようになるまでは、真の風術師とは呼べないのだと言われている。

土術

諸君の足元の岩は硬く感じるかも知れない。しかしよく訓練された土術師にとって、それは水のように流れ、また風のように舞うものである。土術は大地の力を取り入れ、それを術者の意のままに曲げるのだ。土術師達は犬にボールを投げるかのように岩石を投げつけ、その身体を岩で覆うことで厚く頑丈な鎧を形成し、大地に眠る液体を汲み上げるために地下深くへと到達する。硬い岩が土術師の呪文書の背骨を形成する一方で、大地の奥深くから汲み出されたオイルと腐敗した毒は、そのページに踊るインクなのである。

土術師は世界中の様々な職業・地位において見受けられる。農家達でさえ、正当な農業訓練を経ることなく自然を欺いて作物を提供させることができると考え、この魔法の世界に挑戦することがある。幸運な者は、しばしば毒された田畑に対処しようとしているところを目撃される ― 不運な者は、二度と目撃されることがない。

土術の真の熟練者は非常に希少であり、自らに力と安心を与えてくれるエレメントに囲まれることができる巧妙に設計された洞窟で暮らすという。

火術

炎の練達は、その技術をドラゴン自身から学んだのだと主張している。その偉大な獣は劣等種の中に可能性を見出し、最大級の恩恵を — どんな権力も規律も寄せ付けないエレメントを導く力を — 与えたのだと。これが唯一得られる説明だが、蓋然性は低いように思われる。

もし諸君が家を崩壊させる炎を目撃したことがあれば、このエレメントが放縦で気が強いものだと分かるだろう。しかし熟練の火術師はこの力を手懐け、指揮することができる。火術師達は戦場に炎を噴出させ、敵を打つために強力な炎の鞭を召喚し、邪魔する者を盲目にすることができる。

しかしながら、どれほど強力な火術師であっても炎を真に支配することなどできないのではないかという議論がある。火を導き、駆り立て、目標へ向かわせることはできる。しかし炎が解き放たれた後に起きることを、完全に制御できる火術師はいない。実際に、炎の中に狂気を見出し、炎に支配されてしまう魔法使いの物語がある。それらは必然的に、黒焦げの殻と狂人の笑い声だけを残して消えた街の物語と化してしまう。

水術

W水というエレメントは生命を与える錬金薬であり、また自然の破壊的な力でもある。この地を歩く水術師は世界で最も珍重される治療師であるが、傷を与える場合であっても同様に腕が立つ。
　水と氷に精通し訓練を積んだ水術師は負傷を癒やし、自らを厚い氷の鎧で覆い、そして敵の頭上に無数の鋭い氷を招くことができる。

このスキルの多様性は、多くの軍隊が戦闘医師として水術師を求めてきたことを意味する。負傷した兵士を単身で治療し、同時に敵を打ち倒すことができる者として。
　このスキルの訓練は単純ではなく、多くの偉大な熟練者達は沼地の奥深くに、凍結した山の城に住み、もしくは海を渡って放浪する。この技術を習得するために何年も研鑽を積んだ開業医は、自らのコミュニティに称賛されながら帰還することとなる。獰猛な嵐を鎮め、壊滅的な洪水を逸らした、英雄として。

死霊術

「闇の術」に関する書籍は数多い。死者を蘇らせ、甚だしい苦痛を与え、影と一つとなる魔法。多くの者にとって、これは言いようのない邪悪であり、虚無の力と危険な程に近い。しかしそのような魔法にも相応しい場所があると考える者達がいる。

生き物にとって身体は道具以外の何ものでもないだろう？ そして彼らはこう主張する。一度魂が身体を明け渡したのであれば、それを他者の道具として動かしてはならない理由は何だ？ 骸骨は気にしない。彼らはそう答えるだろう。実際は、彼らは諸君が望むことは何でも言うだろうが…　死霊術師は飛び起きる死体を造り、生者を先んじて腐敗させる力を持つ。彼らは生と死と、そしてその中間の多くのものを超越する力を持っている。彼らは襲撃者に自らの痛みを反射させ、敵から命を吸い取ることで自らを若返らせ、戦死者を呼び戻して戦いを続けさせることができる。

多くの者はこの魔法を非難するかもしれないが、目的は手段を正当化するのではないだろうか？　もし死者を戦わせることで悪を止めることができるなら、諸君ならどうするだろうか。

NECRONANCY

多形術

姿を別のものに変える能力は、人々が物語を語り始めてより変わらず、神話と伝説の代物であった。神々が動物として我々の中を歩む物語、半人半狼の物語、手首を翻すだけで敵をやかましい羽毛の山に変えることができる根源の魔術師の物語。だがそれらの物語の真実は何であろう？

それは実行可能であると言う魔法使達がいる。彼らは物事は不動ではなく、変化し得ると言う。自らの肉体に — 自らの力の範囲に — 制限される必要はないのだと。

翼を生やして天空へと舞い上がり、頭皮から蛇を生やして敵を石化する力を手に入れ、自らの皮膚を別のものに取り替えることが可能な根源の魔術師達の物語が語られている。

そのような根源の魔術師は異端者であると言う者もいる —— 神々がこの姿を与えたのであり、我々は彼らの意思を捻じ曲げる立場にはないと。彼らは単に詐欺師であると言う者もいる。信じる者は少なくとも、彼らが手に入れた驚くべき力に関する噂話は数多い。

隠密術

影の中にのみ存在するスキルがある。窃盗と殺生の世界にのみ存在するスキルが。善良で正直な者は、部屋の反対側へと驚くべき精度でナイフを投げる方法を知る必要はない。善良で正直な者は、薬品を染み込ませた布や冴え渡る首絞めで、人を昏倒させる方法を知る必要はない。善良で正直な者は、影から滑り寄り喉を掻き切る方法を知る必要はない。しかし勿論、善良でも正直でもない者は、至る所にいるのである。

悪漢や無頼漢のスキルは、そのボロボロの見すぼらしい本の中でも最も古い芸当である。

殆どの場合、よく研がれた短剣と静かな足取りほど魔術的なものはないが、それらを習得するには長い年月を要する。これらの技の年若い熟練者は極めて少ないが、年老いた未熟者は全くいない。諸君はこれらのスキルを若い時分に早々に学ぶか、学ばずに歳を取るかの二択である。諸君が影の中を歩いている場合、世界は稀に第二の機会を与えることがある。

ROGUERY

狩猟術

S原野を旅する者にとって、生き残ることは最も重要である。快適な家庭から遠く離れて暮らすハンターとレンジャーは、何世代にも渡る過酷な生活の中で技術を磨いてきた。彼らは戦闘の真っ最中に素早く傷を縛る方法や、危険な状況から撤退する方法などの必須技能を極めている —— しかし彼らの主な道具は弓である。

狩人の弓は、それを支える腕ほども重要なものであり、戦闘において彼らがそれを手放す可能性は低い。彼らの弓（あるいは場合によってはクロスボウ）の技術は芸術の域に達し、遥か彼方から標的を射抜くことも、矢を複数の的に跳飛させることも、敵を物陰へと遁走させる速射の弾幕を生み出すことさえできる。

ハンターには簡単な弓しか必要ないからといって、それが簡単な芸当と考えてはならない。それは世界の最も危険な地域における生存の、生涯をかけて磨かれた技なのである。熟練のレンジャーにとって幸運なことに、森の中には彼らよりも危険なものは滅多にない。

召喚術

リヴェロンにおいて、生物の召喚に関する歴史は長い。魔女はその同朋を、悪魔学者は地獄の獣を、シャーマンはトーテムを有する。それら各々は独特のものであるが、全ては同じ魔法の井戸から汲み上げられ、それまで存在していなかった生き物を生み出すことで世界を一変させる。

動物の仲間を望むなら、自分の中の力を呼び出し召喚することができる。属性のトーテムを望むなら、周囲のエレメントから力を得ることで生み出すことができる。

悪魔を望むなら… 大変なことになるだろう。しかしながら、自分の中の根源を幾らか提供すれば、悪魔を召喚し、その力を得ることは不可能ではない。エレメントに生命を与え、味方となる属性の化身を創り出すことができる者さえいる。

この魔法の実践者はリヴェロン中で見つけることができるが、その全てを極めた者は、極めて少数である。

武術

S人が最初に石を棒に結びつけて以来、リヴェロンの種族は互いを殺すための、より良い方法を見つけることに勤しんできた。どんな愚か者も剣の振るい方を教わることはできるが、武道の真髄を学んだ者は全てが己がものとなる。

片手に盾を、片手に近接武器を携えた戦士達は幼少の頃から受け流し方を、突き刺し方を、そして殺し方を学び続けてきた。それらの技を高貴な広間で高給な指導者に囲まれながら学んだ者も、路地裏で、街角で、もしくは膝まで血のりに埋まる戦場で、殺そうとしてくる者達に囲まれながら学んだ者もいる。

武術を極めるということは、どんな状況でも戦う術を知るということだ。敵に襲いかかるために戦場を駆け抜けている場合であれ、友人から敵を引き離すために挑発している場合であれ、単に相手に打撃を浴びせる力を持っている場合であれ、諸君は世界が投げつけてくるものに対して常に準備万端であるだろう。

IV

ブラックウッド動物寓話集からの抜粋

W私はかつての偉大なるドワーフの首都で、図書館と呼べる場所を調べている時に、かなり興味深い本を見つけたことに驚いた。その装丁は粗く、ページは破れ、酷く焦げてしまっていたが、その内容はグリモワールほども神秘的な資料であった。この地のあらゆる生き物の、完璧に近い解説だ！

その全てを掲載することは望むべくもないが、私は最も特異な項目（我らの地域に属するものには特に嘱目した）を選び、諸君の閲読のための抄録をここに記す。

私がこの偉大なる動物誌の貸出しを司書に依頼した時、彼は私に待つように身振りで示した。彼はしばらく箱を引っ掻き回し、司書自身の手によって書かれたバラバラの記録の束を私に差し出した。私が見た中で最も恐ろしい生き物達、ヴォイドウォークンの版画が加わったのだ！ 発生期にあるヴォイドウォークンのこの説話集により、私は彼らの性質をより理解することができた。その知識の一部をここに含めることができることを、大変光栄に思う。

我々は日ごとにヴォイドウォークンの恐怖が増大する世界に生きているが、いつの日かこれらの記述が歴史的興味の対象でしかなくなることを祈っている。

これらの知識は諸君に、旅するときには完全武装しなければならないと警告するだろう。これらの生き物を打倒する方法については殆ど分かっていない。しかし諸君が道端でヴォイドウォークンに出会ったとき、諸君の確実な死の原因の名前を言い当てることは、少なくとも多少の慰めにはなるだろう。

フォレスト・タイガー

Lそのエルフ達は夜に子供を奪われないように、彼らの側を離れずにいた。しかし訓練されたエルフの狩人でさえ、不意を突かれれば闇へと引きずり込まれてしまうだろう。道に迷った旅人達は、その冷たく白い瞳と目を合わせた瞬間に終わりを迎える。

このエルフの森の虎は、彼らの故郷である密林の群葉から獲物を追い詰める。彼らは美しく、優雅で、恐ろしい存在であった。彼らは小さな男であれば一撃で殺すことが可能であり、最も偉大な戦士であれ、その獰猛さに打ち勝つのは困難を要することだろう。この虎達がエルフの森を呑み込んだ死の霧を生き残ったのかは、誰にも分からない。彼らのテリトリーに敢えて踏み込むような者は、誰もいなかった。いずれにせよ、この荘厳な獣は我々に教訓を残している。自然には素晴らしい美があるが、その爪を無視するのは愚か者だけである。

シャムリング・オーク

W森を歩いているときは、野営地の場所に気をつけるべきだ。古く節だらけの木は、雨風に対して良い避難所となる ―― しかし間違った枝木から薪を選んでしまえば、哀れむより他にない。

樹皮と草木の山がリヴェロンの森を彷徨う様子が目撃されることがある。そのような伝説は歴史を遡るものであるが、森が斧に対して噛みつき返してくる記録は近年にしかない。

そのような生き物が（それは生き物なのだろうか？）我々の森に現れたのは、故郷から集団移動したエルフが原因だと責める者もいる。増大する虚無の力の兆候なのだと言う者もいる。真実が何であれ、警戒を怠るな。動きは鈍いかもしれないが、その四肢には数千年の力が秘められている。

エルヴン・スタグ

Y諸君はエルフの森のような場所を見たことはないだろう。そして今は死の霧によってこの世界から消し去られてしまったため、諸君にその機会は訪れない。

私がその森を歩いている時、木々が倒れ、ささやき声が耳を惑わせた。そしてその動物は？ それは他のものとは違っていた。かつては他のものに見えたであろうその雄鹿は、美しい有機的な鎧を身にまとっていた。それはエルフの職人技か？ それともその王国内の動物を守る、単なる森の魔法だったのだろうか？ 私はその生き物にエルフが乗っているのを見たが、エルフが獣を支配しているわけではなかった。彼らは父親が眠る子供をすくい上げて注意深く運ぶように、乗客を受け入れていたのだ。エルフがこの上なく獰猛になるほどに、私はあの森に愛を感じていた。それを二度と感じることができないのではないかと考えると、涙を流さずにはいられない。

アシッド・トード

I諸君がフォートジョイの近くで偶然洞窟に出くわした場合、徹底的に調べなければ極めて痛ましい滅びを迎えるだろう。その地のかつての根源の王ブラッカ・スレックスの穢らわしい魔法は未だに燻り、彼ほども卑劣で邪悪な生き物を生み出し続けている。

このアシッド・トードは巨大でずる賢く、沿岸の洞窟の奥深くに生息している。私が見たことがある他のどんな生物とも異なり、この獣は酸と毒を使って巣穴を形成する。

このスケッチはリーパーズ・コーストに住む人々の報告を元にしたものであり、故に直接このヒキガエルを見る必要がなかったのは幸運であった。しかしながら、私は水掻きのある足跡を目撃したことがある。それは硬い岩を凹ませ、シューシューと音を立てているようであった。

ドワーフの悪夢

W雨が酷いときは、ぬかるんだ地面ではなく木々の中で眠るのが私の習慣になっていた。ある暗い夜、私は枝葉の中でまどろみ、酷い悪夢に苦しんでいた。その止まり木の上から、憎悪が歩き過ぎるのを見下ろすという悪夢に。

その眼は黄色く、その姿は半分は男で、半分は狼。そしてその同族の皮で全身が覆われていた。その長い爪はもう少しで濡れた地面をなぞる程であり、その動きは緩やかであった。この獣が狩りをするときに、デュナが獲物を助けんことを。

雨の覆いがなければ、それは木の上の私を嗅ぎ付け、這い登って私を止まり木から摘み上げていたことだろう。しかし勿論、それはただの悪夢なのだ。私は… 私はそれがただの悪夢だったと、おおよそ確信している…

ホワイト・デス

我々の伝承は、ホワイト・デスについて伝えている。鉱山の奥深くに隠れ潜む生き物。雪花石膏のように白く、その三倍は硬い。この獣は肉を、骨を、そして鎧を貫く爪を備えていると言われている。

鉱山関係者全員が消失したという話さえある。彼らは何らかの魅了の力で闇の奥深くへと誘い込まれたのだと言う者も、単に持ち場を放棄し、恐怖に逃げ出したのだと言う者もいる。

最後の目撃情報は、ドワーフの最初の王テナックスの時代にまで遡る。伝説によれば、彼はホワイト・デスを殺し、その奴隷となっていた鉱夫達を解放したという。これは裏付ける証拠もない物語だ。

ではなぜここで持ち出すのか？ 再び噂が広がり始めたからだ。ホワイト・デスが再び影を忍び歩いているという噂が。私はそれがテナックス王の時代のものと同程度に空虚な話だと確信しているが、夫が闇の奥深くで蠢く何かの音を聞いたと断言する鉱夫の未亡人に出会ったことがある…

サンド・フォックス

F何年もの間、私はこの東砂漠のサンド・フォックスは内気で孤独な生き物だと聞いていた ― それを目撃した者さえ、極めてわずかであるからだ。しかしそれは思い違いであった。それを目撃し、そして生きて戻った者が少なかったのだ。

サンド・フォックスはその生息地の数多くの伝説に登場する。幾つかの物語においてそれはトリックスターであり、絶望した魂を砂漠の奥深くへと、水も助けも届かない場所へと導く。他の物語では、弱者を獲物にする狡猾な日和見主義者だ。その気質の真実が何であれ、過小評価をされていい生き物ではない。

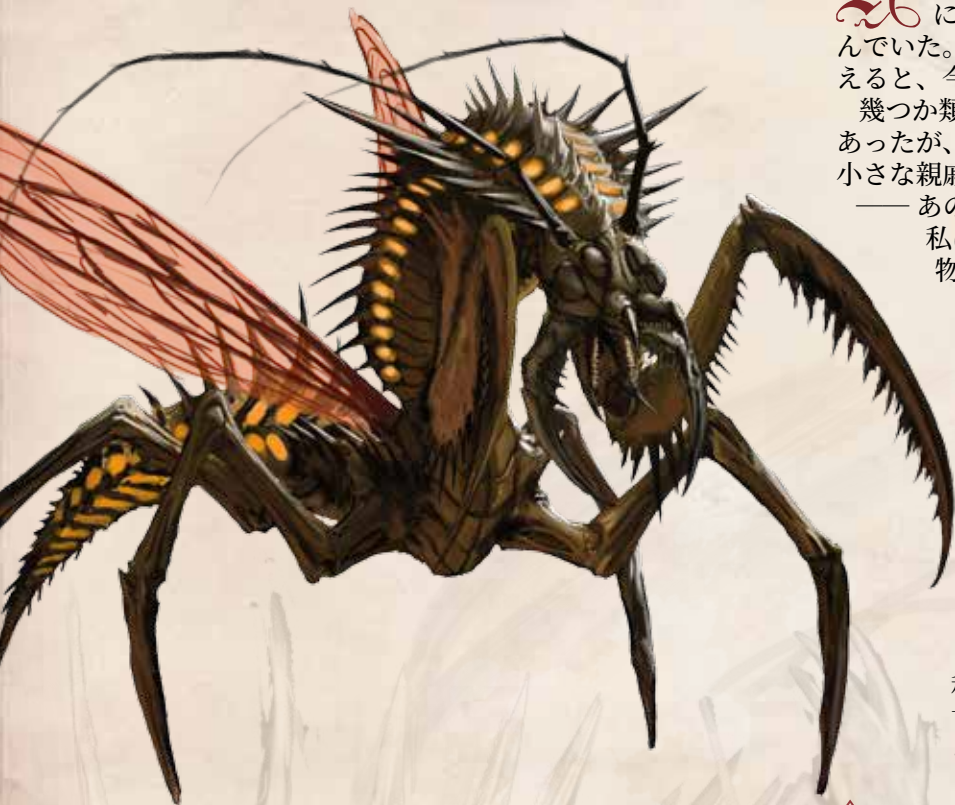
私は旅の中でこの生き物を見たと言わせていただきたい。しかしそれは真実だったのだろうか？ 私は砂漠で何日も過ごし、足跡を辿ってぐるぐると歩き回っていた。水が尽きかけ、砂嵐が激しかったある日、私は軽やかに翻る何かを見た。それは狐だったのだろうか？ それとも熱暴走した私の脳みそだったのか？ それが判明することはない。恐らく、この生き物の性質を考えれば、それが最も良いだろう。

デューン・マンティス

H巨大な砂丘の頂上まで半分のところで、私は他とは異なる大きな風切り音を耳にした。頭上に、これまで見た中で最も不愉快な昆虫が飛んでいた。あの貪欲な顎と棘だらけの脚のことを考えると、今でも冷や汗が吹き出てくる。

幾つか類似性のある小さな生き物を見たことはあったが、あれほど大きいものはない。そのような小さな親戚は、せいぜい鼠に挑戦するのがやっとだ ―― あの獣はオークも苦もなく引きちぎるだろう。

私はリヴェロン中で「ヴォイドウォークン」の物語を耳にした ―― この世界のものではなく、我々を滅ぼすために、もしくは他の邪悪な目的のために、虚無によってもたらされた生き物の物語を。私はそのような生き物かもしれないものを幾度か目にしてきたが、この怪異こそが真のヴォイドウォークンであると信じている！

それは頭部を高く掲げたまま飛び去り、一度も下を見ることはなかった。私が永遠に感謝することになるであろう事実だ。あれが知性を持って動いていたと言えるのは殆ど確実だ。単に次の食事を探す以上の目的を持って飛んでいたのだ。私は更に調べようとしたが、地元の者はこう言うだけだった。「あれを知る者は、死を知ることになる」。あの砂丘に、長く留まろうとは思わなかった。

深みに潜むもの

S沼地には多くの危険がある。沈んだ穴、不浄のガス、有毒な植物 ── しかしそのどれもが、この怪物がもたらす脅威に遠く及ばない。この生き物と沼地を分かつ者達は、それらを美しい海の人魚と比較する（この獣ではなく、その美貌をスケッチできればどれほど良いか）。だが私は懐疑的である。泥沼へと引きずり込まれ、その根源を捕食される旅人達の物語は多い。それは私が聞いた「ヴォイドウォークン」の噂と一致する。魅力的な符合だ...

彼らが喋るのを聞いたと言う者さえいる。それが扱う黒魔法を見たとさえ。しかし彼らは自分の住処にその悪魔を呼び寄せたくないと、知っていることを教えてはくれなかった。彼らを責めようとはすまい。この生き物は蛇のように素早く這いずり、その鉤爪を沈めるだろう。この獣は水辺で目撃されるだろう。腐敗しているほど、その可能性は高い。

私が蒐集できたのは、沼地の穴が黄泉の国へのトンネルであると信じているような沼地の人々の未熟な舌が、彼らを「深みに潜むもの」と呼んでいるということだけだ。彼らは、「潜むもの」は地獄の番犬であり、泣き叫ぶ罪人をその深みへと引きずり込むのだとささやいた。

セイレーン

Y諸君もセイレーンの物語は知っていよう。彼女がどのように漁師を網から ─ 彼らの船から ─ 誘い出し、水底で共に暮らすために連れて行くのかを。諸君はその物語を知っていようが、私は彼女の歌を知っている。

私はセイレーンの賛美歌を三ヶ月前に耳にした。しかしその記憶は、昨日のもののように残っている。私は近くの浜辺から、美しい乙女が漁師の一団をリーパーズ・コーストから呼び寄せるさまを目撃した。彼女は水面を滑り、彼女の歌は男達を引き寄せていた。彼らは破滅へと一直線に帆走していた。彼らの船が近付くと、乙女は海から浮かび上がり、その恐ろしい全容が明らかとなった。その姿は悪魔のごとく、その力は猛々しい。この恐ろしい獣は船を引き裂き、乗っていた魂を喰らい尽くしたのだった。

クラーケン

諸君は荒れて放棄され、漂流している船を見たことがあるだろうか？ 同情や欲望から、その船に近付こうとするだろうか？ その船が諸君の方を向き、棘のある触手がその側面を這い上がり始めた時、諸君は何を思うだろう。

我々が釣り針の虫で魚を誘うように、クラーケンは背中に乗せた船舶で船乗りを誘う。そして一度その長い触手が近付いてしまえば、哀れな船乗りは網の中の魚のように命運が尽きている。

何年もの間、私はそれが実在することに懐疑的であった。確かに存在する可能性はあるとしても。背中に舟を生やす魚などいない。年老いた船乗り達が訴えるようなサイズに達する怪獣などいない。だが、ある夜、私は甲板に立ち、通り過ぎる船を月明かりに見ていた。私は小さな舟が、風に逆らってその船に近付くのを見た。雲が月を隠したが、その暗闇の中で、私は木材が割れる音と、死にゆく男達の叫び声を聞いた。数分後、空が再び晴れた時、その海には何もなかった。小舟も、私が悲鳴を聞いた船乗り達の痕跡もなかった。私はその過ぎゆく雲を永遠に呪い、そして感謝するだろう。

ブラッド・エレメンタル

I私は血が流れ出るのを見るよりも悪いことはないだろうと思っていた。血が流れ出て死体の周りに貯まるのを見るよりも悪いことは。それは違った。何ということだ、私は間違っていたのだ。

この生き物が（これが少しでも生き物と呼べるのであれば）、インプの独創性によるものか、悪魔の力によるものかは分からない。しかしこの汚らわしい放散物は、じっとしていることに満足することはない。血溜まりから生まれたものは、時に別の形をとることがある。

血が床に落ちるのを見ることは恐ろしいが、それが地面から浮かび上がり、目の前で形をなすのは ― それは本当の恐怖だ。その生き物は私の喉へと跳躍し、私は傷だらけになりながら何とか撃退した。

私が逃げ出した時、それは私が残した血痕の上に立っていた。この邪悪な生き物が他者の血液を餌とするのかは分からない。しかしそれは、確かに私の血を楽しんでいた。

オイル・モール

Y諸君も石油をブラックゴールドと呼ぶことはご存知だろう？ まあ、それは光り物のごとく厄介事を引き寄せる。ブラックピット油田はこの黒い生き物達を引き寄せた。行く先々に虚無を広げる、モグラのような巨大な生き物を。鈍重だが強力なオイル・モールは地中を掘り進み、頭上の動きを感知すると地表へと躍り出る。

長く狂暴な鉤爪と丈夫な殻で武装したこの獣は、地表を素早く進むために球状に丸まることが知られている。彼らの星状の鼻は、石油を噴出するために広げることができる。実際、この生き物はどこにでも石油を撒き散らす。松明の扱いには気をつけるべきだ。たった一つの火花が惨事を招くかも知れない。

この獣がどこから来たのか、誰も定かではない ―― 彼らはずっと我々と共にいたが、採掘によって地表へと追いやられたのだと言う者もいる。他の者は、単に近年現れただけであり、邪悪な虚無魔法の結果なのだろうと考えている。

サラマンダー

一部のリザードは自らが、自らだけが、古のドラゴンの子孫だと信じている —— しかし、サラマンダーはどうなのだ？ かつてリヴェロンの空を巡っていた炎と氷のドラゴン達と同じように、サラマンダーは火山の斜面に、氷河の麓に、そして稲妻に満ちた熱帯地方に生息している。彼らはエレメントの生き物であり、周囲の属性を帯びている個体がしばしば目撃される。悲しいかな、この地の暗い場所に住む彼らは、そのエレメントとして虚無を取り込み、その環境と同様に暗く歪むのだと聞いたことがある。

彼らは力強い闘士でもあり、リザード達が遥か昔のドラゴンの理知と優雅さを持っている一方で、サラマンダー達はその粗暴な力を備えている。

しかしそれは、この生き物に利用価値がないと言っているわけではない。彼らをペットとし、犬や猫よりも遥かに尊敬すべきだと見なしているリザードもいるという。これをリザードのいつもの上流気取りだとこき下ろす者も多かろう。しかし私は、火を吐くことができる猫をまだ見たことがない。

アイス・ライノ

W 山岳を越えている時に、眼下の氷河にこの生き物を見たことがある。その凶悪な瞳には、確かに殺意があった。私との間に崖がなければ、諸君はどこかのクレバスの中に、私の骨を見つけていたことだろう。

この生き物が突進してくる様子を目にすれば、静脈中の血液が凍りつくことだろう。まだ凍っていなければだが。アイス・ライノは一つの大きな輝く角と二つの牙を持ち、その体は無数の鋭い氷片に覆われている。そしてその気性は、純粋なる炎だ。

私はその山岳を軽い凍傷と肝を冷やしただけで脱出した。しかしもし諸君が氷の荒れ地に響き渡るその鳴き声を聞いたときは ― まあ、アイス・ライノよりも先に、冷気の手にかかることを祈っておこう。

アイス・マンモス

万が一アイス・マンモスに出くわした場合は、剣と弓を捨てるのだ。短剣と投石器を捨てるのだ。全てを捨てて、そして逃げろ。
氷結の北地には、人殺しの山の伝説がある。その牙で諸君を串刺しにする巨人の伝説や、諸君へと突進するために立ち上がる氷河の伝説が。私はアイス・マンモスがこれらの伝説の起源であると確信している。この本当に巨大な生き物は木々より高く、最高級の槍でさえ霞む牙で武装している。
この獣の皮膚でできた家を誇らしげに自慢する村の話を聞いたことがある。しかし実際に見たことはない。私が目にしたのは、この恐るべき生き物の群れに踏みつけられて崩壊した、村落や野営地の残骸だ。
　この獣に立ち向かわんとする狩人に慰めでもあれば良いのだが、そんなものはない。この生き物の獣皮を覆う氷はどんな刃も寄せ付けず、その牙は諸君を細切れにするだろう。このような生き物に挑戦しようとする者に、お勧めの武器を聞かれたことがある。私の返答は確かいつも、攻城兵器だっただろうか？

リザードの悪夢

Nすべての睡眠が楽しく安らかなものとは限らない。時折心の闇が滲み出ることで、恐ろしい悪夢が顔を出す。それは諸君や私にとっては、大きな試練ではないだろう ― 冷や汗をかいて目を覚まし、闇の中に取り憑いた恐怖を振り払うだけで良い。しかしリザードの夢想家にとってはそうではない。

この神秘家達は古代帝国を守っていると言われている。彼らは他の者が目覚めないような夢の中を歩くのだと噂されている。彼らが歩む道は危険なものだ。もしその夢が暗くなれば ― そして彼らの心が弱っていれば ― どんな獣が現れるか分からない。

この恐ろしい生き物はリザードの夢を狩るのだと言われている。しかしそれは夢想家達にとっては、現実でありすぎる。自らの精神に閉じ込められ、このような悪夢に追われたらどうなる？ それは死よりも悪い運命だろう。

万が一諸君が眠っており、このような生き物に直面してしまった場合は、何が起きたとしても、目を覚ますことを忘れずに。

ドリルワーム

I大地が震えるのを感じた。更に悪いことに、私はその原因である獣を見た。我らの美しい土地の浅層に巣食う怪異を。彼らの生活は、一部を除いて暗闇に包まれている ― そして私はその一部である、彼らの食事を目撃した。

足元の地面がひび割れ、彼らの口が現れた時の恐怖を想像できるだろうか？ 逃れる術はない ― 太陽の下から地下の闇へと運び去る顎から、助かる方法はない。それがドリルワームの獲物の運命だ。

このような形状の獣は何処ででも見つかるが、根源が多量に使われた場所に引き寄せられると見られる異常に巨大な個体が存在する。

私がリヴェロンを旅した時、「ヴォイドウォークン」の物語が囁かれ始めていた。根源に引き寄せられる怪物。その目撃情報は広まっている。これはそのような生き物の一例なのだろうか？

残響の大広間の生き物

私がこの生き物を本当に見たのか、はっきりとは分からない。私は病気で、死に瀕していた。しかし眠っている間、不可思議な岩の風景にそれが浮かんでいるのを見たのだ。

それは私を見ることなく、頭上を通り過ぎていった。実際のところ、それが何かを見ていたのかは分からない。頭部に眼のようなものは見当たらず、しかし岩の柱の間をゆっくりと優雅な動きで漂っていたため、何らかの方法で周囲の世界を認識していたはずだ。その肋骨と頭蓋骨は十分に硬く見えたが、その内部には美しい根源の輝きが満ちていた。

それが異世界だったのか、ただ熱にうなされた夢だったのか、分かることはないだろう。しかしそれは、現実のように感じられた。この手の中の羽根ペンよりも、現実のように感じられたのだ…

The Bane Lands
Reaper`s Bluffs
Bloodmoon Island
Reaper`s Coast
The High Seas
Driftwood
Reaper`s Eye
Stonegarden
Fort Joy
Blackpits
The Hollow Marshes

この地方の土地

旅行ガイドと地図帳

I諸君の炉辺の向こうには世界がある。諸君がこの文章を読んでいる書斎か何かの向こうには。そしてその世界は広く、魅力的で、そして ― 時には ― 絶対的に致命的だ。

　ヴォイドウォークンが大地を闊歩し、諸国家は戦争の瀬戸際にあり、罪深い噂が空を飛び交う。大戦以来、これほど旅をするのに危険な時はなかった。

私はこの地域の真髄をあるがままに捉え、これらページを通して蒸留し、諸君の安全な炉端の外の世界の見事な寸描を提供することに腐心してきた。

　諸君が旅を望むなら、この本が役に立つだろう。この地の選り抜きの領域の手引きとして、もしくは ― さらに有用な ― 諸君が避けるべき土地の警句として。

最後の根源の王
ブラッカス・レックスの歴史

Iフォートジョイで彼が為した恐怖を理解するためには、ブラッカス・レックス自身について理解しなければならない。リヴェロンの黎明期において、根源の魔術師の君主達はこの地のいたる所で偉業を為していた。そして初期の頃は、ブラッカス・レックスもそのような高潔な統治者であった。しかしやがて、多くのことに当てはまるように、彼は根源によって次第に堕落していった。

彼には霊炉を構築した双子のカサンドラがいた。彼の魂を彼女の魂と、彼女の魂を彼の魂と結びつける、強力な呪文だ。悲しいかな、これは愛情よりも、強欲による行いだ。霊炉が完成すると、ブラッカスは彼女をアンデッドのリッチに変えた。彼女が、そしてそれによって彼が、永遠に生きることができるように。

支配を続けるにつれて、ブラッカスはますます暴虐となり、自らの力を強める方法を求めるようになった。彼は忘れ去られた古代の魔法と技術を発見し、発展させ、領土の維持に利用することで、かつてないほどの支配力を示した。

しかし新たに創設されたハンターの騎士団に導かれ、抵抗勢力が拡大した。この勇敢なる戦士たちは、その心に一つの目標を掲げていた。根源の王を退けるのだ。そして、根源の災禍をリヴェロンから取り除くのだ。ある日、ついにハンター達はフォートジョイを強襲し、ブラッカスを本土における裁判へと引きずり出した。

彼はヒューマニティに対する罪の判決を受け、吊るされ、そしてサイゼアルの港町の井戸へと投げ込まれた。リヴェロンにとって悲劇であるが、彼の弟子達がその死体を見つけ、サイゼアルの奥地にある七大神の教会に彼を埋葬した。

その後長い年月を経て、自らを無原罪教団と呼ぶ集団が現れ、その一人であるレアンドラが、霊炉の秘密を学ぶためにブラッカス・レックスの復活を命じた。ブラッカス・レックスは帰還したが、二人組のハンターによって再び打ち倒された（詳細はC. ヒューバート著『キングクラブ亭から始まる物語』を参照）。

彼の統治は遥か昔のことであるが、ブラッカス・レックスの遺産はリヴェロン中で感じることができる —— 彼の記念碑の残骸は未だ風景に点在し、しかし有り難いことに、彼の違法な研究は失われている。

確かに、彼の邪悪な灰の中から、我々は善いものを見つけ出すことができるかもしれない。その主人が阻まれてから長い年月を経て、フォートジョイは神性教団にとって極めて貴重な地となっている。その僻地は危険な人々を隔離するのに最適な場所であり、それを取り囲む沼地が、脱出を事実上不可能としているのだ。

リーバーズ・アイ

F善良で健全な世界の遥か沖合に、リーパーズ・アイの島がある。全ての訪問者にとって忘れられない ― 良い理由であることは稀だ ― この島は、代々その苦悩と苦痛と恐怖以上のものを目撃してきた。

島を取り巻く水は透き通り清らかだが、その海岸は風に削られた威圧的な岩壁を誇っている。その剥き出しの浜辺に育つ植物は、ボロボロの木々と硬い低木だけだ。岸壁自体は、神々に挑むかのように鋭く空中に突き出た形から判断して、人々に近づかぬよう良心から警告しているかのようだ。対照的に、島の奥には青々とした鮮やかな沼地が内包されている。少なくとも、かつては。現在の沼地は腐敗し、悪臭を放っている ―― 虐待された過去の傷跡である。

呪われた狂人以外に見捨てられ、外洋を往復する船は迂回するこの島は、何千年も朽ちゆくままであった。近年までは。

現在この島は、神性教団によって彼らの安全とリヴェロン全体の安全のために連れてこられた根源の魔術師達の住まいである。そこで彼らは、残りの世界の脅威となる根源の魔法を治療するという、神性教団の粘り強い仕事を待ち続けている。

リーバーズ・アイ

フォートジョイ

今日において、この砦はリヴェロンの希望の象徴となっている。それは神性教団が根源の魔術師とヴォイドウォークンの脅威を研究する本拠地である。民間人は厳しく立ち入りが制限されているが、そこはリヴェロンの改善のために神性教団と根源の魔術師が一緒に働いている場所だと、関係する権力者から聞いたことがある。

アレクサンダー主教とその右腕ダリスの注意深い監督の下、神性教団のマギステル達は既に幾つかの新たな技術や、根源の魔術師が自らや他者にもたらす危険を管理する助けとなる処置を開発している。フォートジョイは、人々が発する危険な根源を制限し、それによってヴォイドウォークンを呼び寄せる機会を減らす控えめなネックレス「根源の首輪」の発症の地だという話を聞いた。

それは有効な暫定処置であるが、一方でアレクサンダー主教は世界から根源を完全に取り除く真の「治療」を見つけるために、根気強い仕事を続けている。

勿論、フォートジョイは長い根源の研究の歴史を持っているが、その全てが近年の神性教団の努力ほど名誉あるものではなかった —— 首輪をつけられた無力な根源の魔術師達がその中庭を彷徨う遥か昔、フォートジョイは最も悪名高い根源の魔術師、ブラッカス・レックスのための研究基地であった。

この恐怖の島において、ブラッカスは古代の目に見えぬ魔法を研究し、それを幾つかの装置へと吹き込み、彼に歯向かった根源の魔術師を支配し制御するために使用した。

彼は力ある者から根源を浄化し — そして力なき者を殺す — 杖を作ったと言われている。首輪をつけられた者を完全に支配する革紐を。人々の根源を収容し、彼らの魂を永遠に一つの場所に縛り付けることができるオーブと瓶を。

虚ろの沼地

砦の先に横たわる険しい湿地は、虚ろの沼地として知られている。この沼地を探索し、記そうとした者達の多くは戻ってこなかった。そして戻ってきた者達は、幽霊や怪物の物語を泣き叫ぶのだ。この腐った不毛の地で見つかるのは血と、死と、そして狂気だけである。正気な者はこの沼地を歩くようなことはしないが、もし諸君が気付いたらそこにいた場合、脚が動く限り迅速にフォートジョイへと逃れるべきである。まだ脚があればの話だが。

リーバーズ・アイ

我々のための教訓

Sそれでは、なぜブラッカス・レックスとフォートジョイの物語は問題なのか？ なぜ彼の物語はこれらのページに記されているのか？ 私がブラッカス・レックスの物語を語ったのは、それがこの地の歴史の見所であるからだけではなく、今日の教訓として役立っているからである。この物語は人々の傲慢さの石碑として屹立している。

永遠に生きることができると考える傲慢さが、ブラッカスの強迫的な研究を不死性へと駆り立て、フォートジョイにおける人々への実験へと繋がった。それは虚ろの沼地を未だに損ない続ける、汚らわしい腐敗へと繋がったのである。

そしてそのような化け物を制御することができると考える傲慢さが、レアンドラと無原罪教徒が彼の脅威を再び世界にもたらすことに繋がった。

この物語は、我々が今日の世界で困難に直面した時に、謙虚になることを思い出させてくれる。根源の魔術師達はその力によって腐敗することはないと信じることができると、主張する者達がいる。その力を利用し、我々を脅かすヴォイドウォークンを支配するために使うことができると言う者達もいる。彼らは間違っている。根源が我々にもたらすのは、痛みと苦しみだけなのだから。

リーパーズ・コースト

L外洋の岸を西に、竜脊山脈を東に、険しいベイン・ランドを北に望む、青々とした実り多い土地は、古くからリーパーズ・コーストとして知られている。数多の大変動と脅威とヴォイドウォークンの襲撃を経てもなお、この地域の人々は古くからの海洋取引、農業、産業、そして犯罪の生活を戦い抜き、そして掻き消している。昔々、さほど遠くない過去には、ヒューマンとドワーフが、そして時折エルフとリザードの隣人が、友愛と事業においてこの地で自由に交わり、一方で機会が現れた時には互いのものを優雅に盗み合っていた。現在、ヴォイドウォークンが現実性のベールを越えて現れ、誰もがその帰結 ― 病気、飢餓、非業の死 ― に苦しんでおり、コミュニティ間の断層線が広がりつつある。

　この地方の中心都市ドリフトウッドは、超自然的な不確実性の温床において、相対的に日常的な安息地である。近くのブラッドムーン島とストーンガーデン共同墓地は、この地の恐ろしい篝火物語の中でも、輝かしい評判を欲しいままにしている。私自身はその噂をまだ検証しておらず、いずれかの場所を訪れて生き残ったと主張する人物に出会ったこともない。

リーパーズ・コースト

ドリフトウッド

リーパーズ・コーストの脈打つ心臓は、ドリフトウッドの街だ。ここでは昔からドワーフがヒューマンと協力して魚を捕り、処理し、出荷してきた。この街は長らく忠実な神性教団の拠点であり、城府の中にはマギステルの大隊が輪番で恒久的に駐留している。近年まで、マギステルが街の業務にあからさまな影響力を及ぼすことはなかった —— 平和と繁栄が行き渡る限り、そして犯罪率が食費に食い込まない限り、街の住人は喜んで統治を担い、教団は喜んで彼らに委ねていた。しかしながら現在、ヴォイドウォークンの襲撃、反根源の魔術師の虐殺、そして地元の魚の壊滅は、この地を負のスパイラルへと送り込んでしまった。ドリフトウッドの善良で誠実な人々は懸命に努力しているが、時代が厳しくなるにつれ、善良で誠実な人々はますます少なくなっていると感じざるを得ない。

リーパーズ・ブラフ

Iドリウトウッドからの海岸に沿った絶壁は、きらめく海を横切る地平線まで含めて、旅行者達に美しい光景を提供する。それはまた、短剣や頭蓋骨サイズの岩、鋭かったり鈍かったりする道具の先端によって、不注意な者達に死を提供する。岩場の海岸には難破船が散りばめられている。その大半は、ご想像の通り、徹底的に略奪されている。これらの難破の生存者は少なく、極稀である。しかし彼らは時たまドリウトウッドの黒牛亭に転がり込み、雫を垂らして震えながら、奇妙な光と殺人と影のような人物に関する奇怪な物語を語るのだ。

神性教団は、当然のことながら、その支配権をこのエリアまで広げようとしてきた。時折この地のマギステルの一団が悪党を探すために絶壁へと赴くが、戻った時には（もし戻れたらだが）、燃え尽きた焚き火と空っぽの宝箱の他には何も見つからなかったと報告するのだった。

リーパーズ・コースト

パラダイスダウン

F農家達は数え切れない世代にわたってパラダイスダウンの牧草地を耕し、ドリフトウッドの住民が魚と海藻以外を（それが彼らを不幸にしているわけではないが）口にできるよう、ニンジン、ジャガイモ、トマトを生産している。この丘陵は、農場の家屋が集い、その煙突から煙が立ち昇り、田畑を耕す長く充実した日々を太陽が照らす、穏やかな場所である。パラダイスダウンの人々は、この地方の最高の食物の大半を生み出す控えめかつ美しい生産地として、その小さな一角を愛し、正当に誇っている。

我々はこの農家達が、常に危険な世界にどう対処するのか、まだ目にしてはいない。しかし今のところは、耕すべき田畑と、祝うべき収穫物がある。

リーパーズ・コースト

ストーンガーデン共同墓地

唯一の恒久的な住人は、勿論死者を除けば、エルフの墓守りと、彼の仕事を助ける者達だけだ。私は彼に会ったことはないが、それはかえって幸いであろう。彼は人々との交流よりも、動物との交流を好むと言われている。

D死は全種族の平等主義者らしい。安置される時は、皆が同じ高さにある。ストーンガーデンはリーパーズ・コーストの死者の受け入れにおいて差別待遇を行ったことはなく、共同墓地の各セクションは、文明化された種族間の文化的差異の良い見本となっている。

ヒューマンは箱の中に置かれて地面に埋葬されることに満足する一方で、他の種族は外部の目には極めて奇異に（もしくは野蛮にさえ）映る埋葬儀式を有している。

諸君は共同墓地を見る前に、ドワーフの埋葬儀式を目撃するかもしれない。接近した来訪者が最初に目撃するのは、空を旋回する鳥の輪だ。そして他の墓よりも遥かに高くそびえ立つドワーフの塔が、ゆっくりと視界に現れる。ドワーフ達はこの塔の頂上に死者を残し、空の鳥達に綺麗に啄ませるのだ。

リザードのエリアに近付けば、轟音が聞こえることだろう。しかし怯える必要はない——そこには模造された獣しかいない。リザードは生前の彼らを維持しているという炎に還ることを好み、巨大な石のドラゴンによって火葬される。

エルフ達は、もし彼らが死ねばだが、儀式中に死体を喰らうことを好む。私は遠慮なく、一生理解できないだろうと認めよう。彼らは木々として還元され、祖先達と共に生きることを望んでいるのだという。

諸君の種族が何であれ、ストーンガーデンは人が数時間過ごし、過ぎし者達の生涯に思いを馳せることができる平和と安寧の場所として古くから有名であった。

しかし悲しいかな、昨今ではそれは当てはまらない。虚無が泥さえ汚染し、大半の生きている魂は可能な限り寄り付かない。敢えて立ち入る者達は、奇妙な音を報告している。油の切れた蝶番が軋る音と… 遥か昔に亡くなった遺骨が軋む音を。

ブラックピット

半宵の液体... 黒い蜂蜜... 粗製の茶。石油だ。世界中の機械と、そしてその持ち主の手のひらのためのグリス。リーパーズ・コーストにおいて、その地下の原初の洞窟はブラックピット — この地のための、海から海への油田 — として知られている。かつては非常に収益性が高かった産業も時と共に縮小したが、リーパーズ・コーストで利益を上げ続ける数少ない取引の一つとして残っている。ヴォイドウォークンの襲撃が激しさを増しても、油井やぐらは止まらない。

マギステルは事業と機械を全ての脅威から守ることに熱心であり、故にこの地方で数少ない、比較的安全な場所の一つとなっている。この産業を守る努力におけるマギステルの粘り強さを見たければ、ブラックピットへと旅し、よく油をさした機械のように働く保安部隊を観察すると良いだろう。

私は最近、立坑の労働者にさえ疑いの目が向けられ、神性教団の交代要員によって多数の解雇が行われたという話を聞いた。それはこの地域の価値だろう。神性教団は、スパイや工作員による生産性の低下のリスクを許すことはないのだから。

リーパーズ・コースト

カルウッド

エルフの古代の故郷は、冬眠する灌木のように北方に横たわっている。昔から斯様であったわけではない。かつての祖先の森は、海岸から海岸へと続く緑のパッチワークのように、遥かに広くこの地を覆っていた。そしてここに、竜脊山脈の頂とブラッドムーンの湖畔に挟まれた揺籃の地として、最も太古の森がある。その天蓋はあまりに密集していて暗く、その奥深さは方向感覚を狂わせ、木々と心を通わせることができるエルフ以外は未開の地から道を見つけることなどできない。

エルフの文化と知識の貯蔵庫として、聖なるライフウッドの木々は尊敬と恐怖によって、幾世紀にもわたって他種族に触れられずにいた。エルフの伝説の影響力は長らく続き、木材のために敢えて危険を冒す者は少なかった。

しかし現在、エルフの力は激減し、伝説が利己主義に対して権勢を振るうことはない。古代のライフウッドは船のために、矢のために、貴婦人のデコルタージュを彩る小物のために切り倒された。木々は伐採され、その枝葉が秘密をざわめくことは、もはやない。エルフがどれほど堕ちたのかを無力に思い出させるものとして、わずかに残るのみである。

リーパーズ・コースト

ブラッドムーン島

Nブラックムーン島へ行く者はいない。もしくは少なくとも、そこへ向かった者は帰ってこない。闇の場所として古くから知られるこの場所へは、決して旅するべからずという警告として、このガイドが役立つことを祈っている。もし地元の者達にこの場所について敢えて聞こうものなら、耳にするのは幽霊、悪魔憑き、そして罪深い儀式に関する物語だ。

かつて、遥か昔、この島は高名な司祭の教団を迎え、現存する数少ない記録によれば、彼らは危険な悪魔祓いの聖なる任務に献身的だったそうだ。この教団が何故どのようにして失敗したのか、そしてこの島が何故どのようにして恐怖の温床となったのか、それは定かではない —— 真実が何であれ、憂慮すべき現実が暗い影を投げ掛けてから、長い月日が流れている。

時折、この地の謎が旅人達の良識を曇らせることがある。この島で彼らが何を見つけたのかは知らないが、この場所について私に真剣に聞いてくる者達が、そこで何を見つけたのか語りに戻ってくることはないということだけは知っている。

ストームデイル

B竜脊山脈とアークスの聖なる都市の門の間には、諸君が想像するよりも遥かに少ない日常品を巨大な主要都市へと供給する、枯れた後背地が横たわっている。長きにわたる過耕作によって、現在のストームデイルはアークスの住民と山脈に住まう恐怖とを隔てる役割しかない。

このような目立たぬ空間のご多分に漏れず、ストームデイルの黄昏の中で行われる活動は風流なものではない。しかしどんな都市にも無法者が隠れる場所と、市民が放浪し、殺されれて財布を奪われる野生の庭が必要なのである。奪われるのは彼らの衣服や、皮膚でさえあるかもしれないが。実際に、この血まみれの土壌の上にいるのは、大多数が慧眼なルシアンの日の巡礼者であり、その最後の光景は遥か遠くから冷たい視線を投げかける、アークスの門を守る巨大な彫像である。旅人は気をつけるべきだ。その石の耳は、どれほど助けを請うても傾くことはない。この地において重要な悲鳴は、来たる荒天の風による警鐘のみである。

アークス

アークスは神性教団の軍事力の中心となり、ルシアンとルシアンの流儀に対する揺るぎなき献身を持つパラディン達の拠点となっている。ここはまたリヴェロン中の多くの者にとって、巡礼の旅の中心地である。世界の隅々から偉大なる大聖堂へと人々が集い、無窮の祈りに加わるのだ。実際に、その外国人の多くはこの都市に定住する —— 諸君はヒューマンが、ドワーフが、エルフが、そしてリザードが、ルシアンの眼光の中に共存して平和に生きているさまを目撃することだろう。これは都市の元老達が、神人を、彼の歴史を、そして彼が世界にもたらした全ての善を祝うための祭日、ルシアンの日によってもたらした流入だ。それは祈りの日であるが、同時に饗宴の、劇団の、そして音楽の日でもある。悲しいかな、本年のルシアンの日の祝典は、一つの演奏中の騒動によって損なわれてしまった。しかし指導者達は、今後のルシアンの日の祝典においては、都市のマギステルとパラディンが協力し合い、この最も神聖な日においてそのような冒涜的な光景は二度と目撃されることはないだろうと保証した。

　アークスの輪郭の大半は大聖堂が占めているが、この都市は単なる巡礼の地にとどまらない。ここは商業の中心地であり、この地で最も素晴らしい港と運河を誇っている。ここは学問の中心地であり、その見事な図書館は何人たりとも拒むことはない。そして勿論ここは、全国民の代議員が集い、平和と協調の精神で世界中の問題を論じ合う、政治の中心地である。

多くの者にとって、この聖なる都市は世界の中心だ。確かにこの都市は、我らの時代で最も重要な人物を内包している。大戦の終わりに倒れた神人ルシアンの最後の安息地を諸君が目にするのは、まさにこのアークスなのだから。

無窮の祈り

ルシアンが亡くなり、その聖なる遺骸がアークス大聖堂の墓所に埋葬されてから、人々は彼の復活と神性のために休むことなく祈り続けてきた。それは果てなき通夜を続ける一握りの信心深い人々から始まった。ある者が寝ている間は、他の者が祈る。その逆もまた然り。彼らは時に他の巡礼者を加え、ルシアンの日が地元の祭から大規模な現象へと花開くにつれて、無窮の祈りもまたルシアンの崇拝を生み出す大聖堂ほどにも不可分な慣習となり、アークスの都市において永続的な地位を得たのであった。

『多くの人々はこの大広間をあの世の一種だと想像している ―
死ぬべき定めの世界で失われた魂が再構築される場所だと』

残響の大広間

W前述の場所の大半を諸君が旅することはないであろう一方で、我々全員の前方に横たわる行き先がある。残響の大広間だ。私は他の場所を記述したのと同じほどの誠実さで、この地について書きたいと願っているが、まだこの大広間を踏破し、そしてそれを伝えに戻った人物に出会ったことがない。それでも私は、この最終地点を除いてしまえば、如何な旅行ガイドも完成しないと感じている。

多くの人々は、この大広間をあの世の一種だと想像している —— 死ぬべき定めの世界で失われた魂が、再構築される場所だと。それらの魂は炉に入り、生きとし世界へと再生・再統合されるか、虚無へと向かい永遠に失われるのだと言われている。「大広間まで」の噂話は告別と覚醒に溢れている —— 失われたものが永遠に失われたわけではないという安心感ゆえだろう。

懐疑論者はいつもの通り、これは完全に空想に過ぎないと断じている。彼らは、その大広間は集合知的な想像力による虚構か、単に我々のものとは異なる誤解された世界であると主張しているのだ。そこは神々の領域であり、彼らはその場所から常命の領域を見下ろし、創造物の評価をしているのだと説明する者さえいる。しかし議論が白熱したとしても、我々が確かに知っている唯一の真実は、真実が何であるか全く分からないということだけである。事実であれ創作であれ、残響の大広間はリヴェロンの住人にとって多大な慰安と大きな想像力の源なのである。大広間の中には何が待ち受けているのだろうか？ 思い人の追憶か、未知の大陸か、神々自身か。諸君が信奉者であれ懐疑論者であれ、我々はいつの日か、真実を見い出すことになるだろう。

結言

A斯様にして、私はこの土地を、私が見たままに提示した。リーパーズ・コーストは生きるには魅力的な場所であることは異論がない（そして、死ぬには些か普通の場所だ）。それは周囲で繰り広げられる歴史を目撃してきた。今日のリーパーズ・コーストは、歴史自体を作り上げているかのようだ。

この本に記された地を訪れることがあれば（私は諸君が、その地で最悪の獣を避けることができることを祈っているが）、諸君は感動し、苦悩し、もしくはその両方を経験することになるだろう。私が旅した場所、出会った人々、目にした物は、私自身に深い影響を与えている。私はこの地が引き起こす全幅の感情を感じ取った ―― 恐怖から称賛、愛から憎しみ、悲痛から果てなき歓喜まで。そして深く、暗い絶望を。

私は過去を照らすために、そして現在を照らすために、この本を起草した。しかし、未来については何とも言えない。我々は、ヴォイドウォークンが跋扈し、各種族の互いを見る目は疑念を増し、新たなゴッドウォークンが光へと踏み出していると噂される世界に生きている。

悲しいかな、私は歴史家であり、千里眼を持ち合わせてはいない。リーパーズ・コーストに（そしてリヴェロンにも）何が起きるのか、諸君に伝えることはできない。しかし未来の世代が、仰天すべき物語を持ち合わせていることだけは、約束することができるだろう。

~

アークス歴史ギルド
クランリー・ヒューバート

クレジット

DIRECTOR

Swen Vincke

WRITING DIRECTOR

Jan Van Dosselaer

LEAD WRITER

Sarah Baylus

WRITERS

Charlene Putney
Devin Doyle
John Corcoran
Kevin VanOrd
Stephen Rooney

ART DIRECTOR

Joachim Vleminckx

CONCEPT ARTISTS

Tania Bureau-Civil
Jeroen Devriendt
Dan Iorgulescu
Maxime Ponslet
Cliff Laureys
Koen Van Mierlo
Evgeniya Katsubo

BOOK PRODUCER

Kieron Kelly

GRAPHIC DESIGN

Gary Nicholson

SPECIAL THANKS TO

Chris Avellone
TAKEOFF UK
The Larian Publishing Team